機動戦士ガンダム ～たった２人の特殊部隊～

ARK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダム　～たった２人の特殊部隊～

【Ｎコード】
Ｎ５６９１Ｕ

【作者名】
ＡＲＫ

【あらすじ】
宇宙世紀００８６年。ティターンズ所属新米パイロット、アヤ・メイソン中尉はアフリカにて作戦が失敗し、絶体絶命の危機に陥り死を覚悟した。しかし、その時１機のガンダムが彼女の前に現れ、その圧倒的な力で彼女を救った。後日、彼女は作戦失敗の責任を押し付けられ、ティターンズ除名、１階級降格、更には左遷されてしまう。

ＦＩＬＥ：０　蠢く闇（前書き）

どうもＡＲＫです（＾∀＾）ノ
どうしてもガンダムで連載をしてみたかったので、してみました。
まだまだいたらぬ面も多く読みづらいと思いますが、どうか暖かい目でお願いします。

FILE：0　蠢く闇

とある密林にある研究所から、2台の装甲車と、その装甲車に挟まれるように1台の輸送車が縦に連なりながら出て来た。輸送車の中には、研究所から持ち出されたアタッシュケースが積まれている。中身が何なのかはわからないが、周りを取り巻く《地球連邦軍》兵士の緊張した面持ちから、何か特別危険な物だとわかる。輸送車はこれから密林を抜け、最寄りの基地からアタッシュケースをシャトルへ詰め替え宇宙へ上がり、《ティターンズ》拠点（グリプス）へ運ばれる予定だ。

普通なら簡単にこなせる任務だ。ただAという地点からBという地点へ物を移動させ、更にCという地点へ送るのみ。しかし、今回はそうは行かなかった。

「隊長、もう時期輸送車が目標地点を通過しますぜ…。」

何故なら、その輸送車を狙う一団がいるからだ。

「よし、モビルスーツを準備しろ…。ギリギリまで動くなよ…。」

その一団とは、《ジオン公国軍》…の残党。地球に残り、今は無き祖国の再興を夢見る軍隊。

「「「イエッサー…」」」

隊長の《テック・D・マクガニル大尉》の指示により、部下達はそれぞれモビルスーツに乗り込み、出撃準備に入る。

そしていよいよ、輸送車がテック率いるジオン残党軍の前に差し掛かった。

「さぁて、ショータイムの始まりだ…。モビルスーツ隊！出撃！」

『『『イエッサー！』』』

テックの合図により、《ＭＳ－０６Ｊ　陸戦型ザク？》が２機、密林の木々の間から躍り出た。躍り出た陸戦型ザクは、先ず最初に先行する装甲車へ《ザク・マシンガン》の砲弾を喰らわせ進路を断ち、次に後方の装甲車へ《ザク・バズーカ》を放ち退路も断つ。これにより輸送車は鉄の塊と化した装甲車に前後を阻まれ、立ち往生する羽目になった。すると、その輸送車から数名の連邦軍兵士現れ、アタッシュケースを持った兵士を取り囲むようにモビルスーツの目が届かない密林の中へ逃げ込もうとする。

『隊長！予定通りそっちに向かいましたぜ！』

「こちらも確認した…行くぞ！」

「「「イエッサー！」」」

その瞬間、待ってましたと言わんばかりに身を隠していたテック達がライフルを撃ちながら連邦兵士に襲いかかった。

「ブツには手を出すなよ！」

そして慣れた身のこなしで兵士を撃ち殺して行き、いよいよアタッシュケースを持った兵士だけになった。

「さぁて、そいつを渡してもらおう…。」

テックはアタッシュケースを持った兵士にゆっくり近付く。

「お、お前らジオンだな！」

「だったら何だ？」

「お前らなんかに渡すか！」

兵士は腰から拳銃を抜き取り、テックへ向けた。しかし、それより速くテックは腰にぶら下げた曲刀を抜き取り、素早い動きで兵士の胴体を斜めに切り裂いた。

切り裂かれた兵士は、構えた拳銃を何の役にも立てず大量の血を噴き出しながら仰向けに倒れた。

「相変わらずの見事な太刀筋です、隊長。」

「ありがとう、少尉。」

テックは部下の賞賛に片手で答えながら、兵士の片手からアタッシュケースを取り上げる。

「よし、ブツは回収した！撤退するぞ！」

「「「イエッサー！」」」

目標のアタッシュケースを手に入れたジオン残党軍の一団は、モビルスーツ共々密林の闇の中へ消えていった。

ＦＩＬＥ：０　蠢く闇（後書き）

次回はあらすじに沿ったストーリーで書きます。

ＦＩＬＥ：１　白い悪魔、再び（前書き）

どうも（＾ｏ＾）／

予告通りあらすじに沿った内容になりました。面白いかどうかは別ですが、お楽しみ下さい。

ＦＩＬＥ：１　白い悪魔、再び

地球連邦軍ティターンズ所属中尉、《アヤ・メイソン》はこの日、アフリカにて絶体絶命のピンチを迎えていた。

何故なら自分以外の味方は全滅、或いは撤退し、完全に孤立していたのだ。しかも、周りにはジオン残党軍のモビルスーツ隊に囲まれる始末。彼女はパイロットとしての実戦経験が全く無く、この作戦が初陣である。更に彼女の乗る《ＲＧＭ－７９ＣＲ　ジム改高機動型》もボロボロになってしまい、まさにどうしょうも無い最悪の状態。

「だ、誰か応答を…！た、隊長…！」

涙ながらに無線に叫ぶが、《ミノフスキー粒子》が濃いせいなのか、或いは捨て石にされたのか全く返答が無い。そんな彼女をあざ笑うかのように、ジオン残党軍は更に彼女を追い詰める。

「私…、死んじゃうんだ…。みんなに見捨てられて…。孤独に…。」

死を覚悟した瞬間、どこからともなくビーム兵器による閃光が走った。そのビームの火線は、彼女の一番近くにいた《ＭＳ－０９Ｆ／Ｔｒｏｐ　ドム・トローペン》の持つ《ジャイアント・バズ》を撃ち抜いた。次いで幾つもの火線が彼女の周りに広がり、ジオン残党軍のモビルスーツ隊を怯ませた。

『よく耐えた。後は任せろ。』

無線から聞こえたその声と共に、白と紺色のカラーリングをした《ＲＧＭ－７９ＦＰ　ジム・ストライカー》を思わせる重装甲と大

型バックパックを装備した、ガンダムタイプの機体が彼女の盾になるように現れた。そのガンダムは一瞬静止したかと思うと、《ビーム・ライフル》を放り投げ、バックパックから円筒型のものとは少し変わった平型の粒子束を形成する《ビーム・サーベル》を2本取り出し、ジオン残党軍へ躍り掛かった。普通なら無謀な試みだが、このガンダムは敵の火線をヒラリヒラリとかわし、縦横無尽に次々と切り刻んで行く。

「す、凄い…。」

彼女の驚愕をよそに、あっと言う間にジオン残党軍のモビルスーツ隊を1機の《ＭＳ－０７Ｂ３　グフカスタム》を残して殲滅していった。まさに一騎当千。《一年戦争》の英雄、《白い悪魔》の名に恥じない戦いぶりだ。

更にそのガンダムは、コクピットは狙わず手足や動力源など致命傷にならない部分を攻撃し、確実に行動不能にしていた。

『ガ、ガンダム！貴様はいつも我々の邪魔を！』

グフカスタムは《ヒート・サーベル》を構えながら、ガンダムにオープン回線で怒鳴りつける。

『無駄な殺生しない。投降しろ。』

かなりご立腹なグフカスタムに対し、ガンダムはビーム・サーベルをバックパックにしまい、無防備な状態でグフカスタムにそう言った。

『バカにするなぁぁぁ！』

ガンダムの行動に更に腹を立てたグフカスタムは、そのまま真っ直ぐヒート・サーベルをかざしながら突進する。

「危ない！」

しかし、ガンダムは冷静な行動でヒート・サーベルの一閃を避けると、バックパックからビーム・サーベルとはまた違ったナックル状の武器を取り出し、グフカスタムの腹部へ当てる。すると、その武器からスパークが走りグフカスタムを行動不能にした。まるで”居合い”のようだ。

「凄い…、あれがガンダムの力…。」

アヤはパイロットスーツのヘルメットを外しながら呟いた。そして自分とは比べものにならない力量の差に体を震わせた。

ＦＩＬＥ：１　白い悪魔、再び（後書き）

次回はアヤの新たな配属先をご紹介します。

FILE：2　雑用部隊（前書き）

どうも。今回はアヤが新たに配属された部隊が登場します。上手く書けた自信は無いですが…。

そして、登場する基地の内部構造や部隊はオリジナルなのであしからず。

FILE：2　雑用部隊

この日、アヤ・メイソンはムスッとしながら《ニューヤーク基地》の廊下をツカツカ歩いていた。手には私物の入った段ボール箱が一つ。

理由は、あの作戦の失敗を彼女に全て押し付けられ、ティターンズ除名、1階級降格、更には左遷されてしまったからだ。確かに彼女は孤立し死にかけた。かといって、作戦をムチャクチャにしたのは彼女では無い。最初彼女は初陣ということもあり、配属された部隊の一番後ろにいた。暫く後ろで後方支援をしていたら、急に前方が騒がしくなり、隊長機を含めた数機が後方へ下がってきた。そして去り際に彼女へ、『お前の機体が一番損傷が少ない！殿をやれ！これは命令だ』と言われたのだ。彼女は命令に従い、味方が撤退している間ずっと弾幕を張っていた。その結果、彼女は敵に囲まれ孤立してしまった。真に責任があるとすれば、無能な部隊長である。

とまぁ、何時までも終わった事を引きずっても仕方ないと彼女は知っているので、次に配属される部隊に期待する事にした。ところで次に配属される部隊というのが、《特別命令遊撃部隊》という全く聞き覚えの無い部隊だ。名前からして左遷とは思えない、どちらかと言えば栄転のような名前の部隊だ。果たしてどんな部隊にしろ、ちょっとは期待しても良いかもと彼女は少し機嫌を直した。

そしていよいよ、その部隊の隊長と御対面である。アヤはニューヤーク基地の《連邦捜査機関》の部屋の奥にある、小部屋に出向いた。連邦捜査機関とは、地球連邦軍絡みの事件を担当する、言わば刑事のような部署だ。捜査官の服装は、街に出向いても怪しまれないよう、もっぱらスーツか目立たない私服などである。その小部屋の入り口の前には、どういうわけか連邦捜査機関の男性兵士が集まっていた。

「ちょっと失礼します。」

アヤはその男性兵士を掻き分け、小部屋に入る。

「本日付けで特別命令遊撃部隊に配属になりました！アヤ・メイソン少尉です！よろしくお願いします！」

元気が取り得のアヤは、持ち前の明るさで新しい部隊長に挨拶をする。その部隊長は、片手に資料を持ち彼女に背中を見せる形で座っていた。その視線の先にはテレビが置いてある。現在ポルノ動画が流れている。大方、男性兵士が集まっている理由はコレであろう。

「特別命令遊撃部隊、部隊長のライト・グレイディだ。」

（新しい部下が来たのにその態度？それに仕事中にＡＶだ何て…。）

その部隊長（ライト・グレイディ）の振り返りもせず挨拶をし、ポルノ動画に夢中になっている態度にアヤは多少ムッとしながらも、部屋の中を物色した。部屋はかなり小さく、デスクが２つに資料棚が１つ、後は冷蔵庫やテレビなどの多少の生活用品が置いてある程度である。

「デスクは空いてるのを使ってくれ。」

「あ、はい。わかりました。」

（って、２つしかないし…。あれ？何で２つだけなんだろう？）

アヤはそんな事を疑問に浮かべながら、ドアの近くにあった空いているデスクに段ボール箱を置いた。その時、丁度動画が終わったようで、ライトがテレビを切って資料に２，３何か書き込んだ。

「あの、それ何ですか？」

アヤは思い切って動画の事を聞いてみる。

「見ての通りポルノ動画だ。軍の連邦捜査官が押収して来た品、所謂証拠物件で、裏かどうか確認している。」

ライトは相変わらず後ろを向きながら答える。

「へぇ…って、もしかしてコレが仕事何ですか？」

「あぁ、そうだ。」

「雑用じゃ無いですか！？」

「雑用だろうと何だろうと、頼まれれば何でもする。それが、特別命令遊撃部隊の仕事だ。」

アヤは目を点にしながらライトの背中を見つめる。まさか、雑用が仕事の部隊があるなんて。しかも、そこに自分が配属されるなんて。

（私…、ホントに左遷されたんだ…。）

彼女はデスクに両手をつき、負のオーラを放出した。ちょっとでも特別命令遊撃部隊に期待を抱いていた自分が恨めしく思えたからだ。

「まぁ、たった今全ての証拠物件を調べ終えた所なので、仕事は無

くなったのだが…。」

「あ、そうですか…。」

いかにも仕事が無くなり残念という声色でそう言ったが、内心ポルノ動画を見なくて済んだとホッとしている。

「じゃ、コレ運ぶの手伝って貰えるかな？」

そう言ってライトがポルノ動画がビッシリ入った段ボール箱を抱え、初めてアヤへ振り返った。

「え？はい。わかり…まし…た…。」

アヤは振り返ったライトの姿を見て、言葉を無くした。簡単に言えば、一目惚れしたのだ。ライトはきちっとした連邦軍の制服を着込み、少し長めのショートヘアで少し影のある顔立ち。その影から妖しく覗く青い瞳。まぁ、モデルや俳優と比べれば劣るものの、その辺の男性と比べればイケメンの部類に入るのでは無いだろうか。しかし、アヤが最も心を惹かれたのは、その青い瞳だ。彼女はその瞳から放たれる、妖しくも優しい光に魅入られたのだ。それからもう1つ、首のあるものに気付いた。それは、火傷とも裂傷ともつかぬ、ただ酷い怪我を物語る傷痕である。その傷痕は恐らく右胸の辺りからから伸びているのであろう。

「どうした？」

「あ、いえ！…意外と重いですね。」

アヤは慌ててライトから段ボール箱を受け取った。

「これから案内する。ついて来い。」

「は、はい！」

ライトも段ボール箱を抱え、ツカツカと部屋を出て行った。

部屋を出て向かった先は、ニューヤーク基地内の証拠保管庫である。特別命令遊撃部隊の部屋からは少し距離はあったものの、疲れる程の距離ではなかった。2人は手っ取り早く証拠物件を棚にしまうと、そそくさと部屋までの帰路へついた。その間、アヤは終始挙動不審だったとか。

「あの、隊長。お聞きしたい事が…。」

その帰り道、アヤは気になっている事を思い切って聞いてみることにした。

「何だ？」

「他の人はどうしてるんですか？」

そう、まだ配属されて間もないとはいえ、ライト以外の特別命令遊撃部隊の人員に誰一人として会っていないのだ。

「他にはいない。」

「はい？つまり、その…。グレイディ隊長と私の2人だけという意味ですか？」

「つまりそういう事だ。」

何という事か。まさかたった2人だけの特殊部隊があるなど、誰が想像したものか。しかしアヤの胸中では、（これはこれでチャンスなのでは？）と、囁く声がある。（この状況を上手く利用しライトと親しくなれば、果たして彼を我が物に出来るのでは？）と。

「あ、もう1ついいですか？隊長のその傷って、いつできたものなんですか？」

「一年戦争の時だ。ヨーロッパでザクにやられた。」

ライトは意外にあっさり答えた。それと同時に、彼が一年戦争経験者だということもわかった。

「そうなんですか…。スイマセン、余計な質問してしまって…。」

「フッ…、全くだ。初対面でこの傷の事を聞いたのは君くらいだぞ？」

「はうっ…！」

それを聞いた瞬間、アヤは自分がどれだけデリカシーの無い質問をしてしまったのか気付いた。彼女が何か釈明の言葉を考えていると、不意にライトが部屋に行く道とは違う門を曲がった。

「あれ？どこ行くんですか？」

「格納庫だ。見せたいモノがある。」

「え？あ、待って下さい！」

アヤは疑問を浮かべながらも、慌ててライトの後を追い掛ける。
一体ライトが見せたいモノとは何であるのか。そんな事を考えながら。

FILE：2　雑用部隊（後書き）

次回、モビルスーツを紹介します。

FILE：3　ガンダムのパイロット（前書き）

今回は内容的には若干薄い話しです。後、ガンダムのネーミングがイマイチです…。

FILE：3　ガンダムのパイロット

アヤ・メイソンはとても驚いていた。
証拠保管庫からの帰り、ライト・グレイディに格納庫へ連れて行かれたアヤが見せられたモノは、とても意外なモノであった。基地の格納庫には、主力モビルスーツ《ＲＧＭ－７９Ｃ　ジム改》や、新型の《ＲＧＭ－１７９　ジム？》をはじめ、支援機として《ＲＧＣ－８３　ジム・キャノン？》などの機体が多数ある。それは全て基地の主力部隊などのモノで、それなり数がある故、都市防衛や基地防衛は容易であろう。そんな量産型モビルスーツ群の端の方に、特別命令遊撃部隊のモビルスーツが２機佇んでいた。その２機のモビルスーツうち、白と紺のモビルスーツがアヤを大いに驚かせた。

（この機体…、アフリカで助けてくれたモビルスーツ…？）

そう、それはまさしくアフリカでアヤを助けたガンダムタイプの機体であった。しかし、今は重装甲が取り外されて随分と華奢になっている。

「ＲＸ－７９　ガンダム・ストライカーだ。」

「ガンダム・ストライカー…。」

アヤは思わず名前を復唱した。《ＲＸ－７９［ＦＰ］　ガンダム・ストライカー》と呼ばれるその機体は、ジム・ストライカーのように全身を《ウェラブル・アーマー》で覆い、大型バックパックを装備した接近戦を得意とする機体である。

「あ、あの、この機体、誰が乗ってるんですか？」

「そりゃあ、大尉殿さ！」

アヤ問に答えたのは、工具を持った年配の男性であった。この機体の担当者なのだろうか。

「おやっさん、調子はどうだ？」

「あぁ、砂埃がちっとばかし厄介だったが、バッチリだ。」

「忙しいとこスマナイ。助かるよ。」

「なぁに、こちとら新型いじれて満足さ。」

ライトとその年配の男性は親しげに会話しだした。

「ちょっ、ちょっと待って下さい！あの時のガンダムのパイロットって、隊長だったんですか！？」

「そうだが？」

驚くアヤに対し、ライトは何食わぬ顔で答える。

（そうだが？って、もっと早く言ってくれれば…。）

「あ、その…。あの時はありがとうございました！」

「礼はいい。気にするな。それより、見せたいのはコッチの機体だ」

そう言うとライトは立ち並ぶもう1機の機体の前まで歩んだ。

「君にはこの機体に乗って貰う。」

「コ、コレ、ガンダムですか！？」

そう、その機体は紛れもなくガンダムの頭をした機体であった。ライトのＭＳと同系統の接近戦型の機体で、機体色がマゼンダと白のカラーリングをしている。不思議な事に、ウェラブル・アーマーが装備されていない。

しかし、今のアヤにはそんな事関係の無い話しだ。

「わ、私がガンダムのパイロットに…！？」

「不服か？」

「い、いえ！そんな事は…。ただ、ちょっと驚いたもので…。」

改めてその機体を凝視したアヤに、喜びやら困惑やらが混ざり合った、複数の感情が襲った。彼女にとって、ガンダムと言えばまさに伝説の存在。躊躇うのも無理は無い。

「この機体はこれからフルアーマー装備を施してもらうつもりだ。」

「フルアーマー装備…ですか？」

「ウェラブル・アーマーが余ってないんだ。申請はしてはいるが、窓際部隊は常に後回しにされるのさ。」

アヤの疑問にライトは自嘲するかのような言葉を述べた。ライトの言葉、それを思えば、何故その窓際部隊にガンダムなんてモビル

スーツが、それも2機も配備されているのだろうか。

「あの…、私なんかに使いこなせるでしょうか？」

「使いこなして貰わねば困る。」

ライトはそう言うと、アヤの頭に手を乗せこう続ける。

「壊したら…、弁償な。」

「えぇ！？」

それが冗談なのか本気なのかは表情からはわからなかったが、微かな笑みを浮かべながらライトはガンダムのコクピットへ足を運ばせた。

ＦＩＬＥ：３　ガンダムのパイロット（後書き）

次回は新キャラが登場する予定です。

ＦＩＬＥ：４　アジアの旧友（前書き）

今回は新キャラが２人出ますが、そんなに出番がありません…。

ＦＩＬＥ：４　アジアの旧友

アヤ・メイソンはこの日、少し懐かしい人物と再開した。
アヤはここ数日、彼女の機体になったＲＸ－７９［ＦＰ］　ガンダム・ストライカーの演習を行っていた。特別命令遊撃部隊は雑用をメインとする部隊であるが、それと同時に窓際部隊であるが故、基本的に暇なのである。なので、新米パイロットである彼女の演習を行っているのである。
ガンダムは既にフルアーマー装備が施されており、《ＦＡ－７９［ＦＰ］　フルアーマーガンダム・ストライカー》になっている。武装は右肩の《ビーム・キャノン》、背中の《誘導ミサイル》、腰部両側面の《平型ビーム・サーベル》、《頭部バルカン》等の固定武装の他、ショートバレルの《ビーム・ライフル》、ジム・ストライカーと同じ《スパイク・シールド》を装備している。コクピット内は《全天周囲モニター・リニアシート》と最新式である。
通常より多数の武装を装備しており、そのことが彼女を苦しめていた。武装が多いという事は、それを使いこなせるだけの判断能力と技量が必要だからだ。しかし、練習を重ねる事で、かなり慣れてきたようだ。

「すごいなぁ…。フルアーマー装備してるって言っても、ジムなんかとパワーも反応速度も桁違い…。ヘタをすれば、コッチが振り回されそうだ…。ん？通信？」

ここ数日の演習を通し、感じた感覚を口中で呟いていると、手元のモニターに通信を知らせる表示が現れた。

「隊長から？…アヤ・メイソン少尉です。」

通信はニューヤーク基地からで、ライトによるものであった。
『メイソン少尉、演習は終了だ。帰投しろ。』
「了解、直ぐに戻ります。」
通信に答えたアヤは、慣れた動きで真っ直ぐ基地へと帰投する。
格納庫へ入ると、いつものように機体を隅の方へ運ばせライトのガンダムの隣へ位置させる。
「よっ！お疲れさん！」
コクピットから出ると、作業服に身を包んだ長い黒髪の若い女性と鉢合わせした。
「エリー。」
その女性の名は《エリー・タウンゼント》という技術少尉である。新人の整備士であるが、特別命令遊撃部隊のモビルスーツを任されている。しかし、彼女はあくまで整備士で、特別命令遊撃部隊の一員ではない。アヤとは同じ時期に配属され、年も近いという事もあり親しい友人関係である。
因みに、前回の《おやっさん》という男性は、ニューヤーク基地の整備士を束ねる整備士長である。
「調子良さそうじゃん。大尉も褒めてたし。」
「え！？ホント！？嬉しいな…。」
アヤは顔を赤らめ遠くを見る。ここ数日、彼女はライトに骨抜き

状態なのだ。そんな彼女を、エリーは冷ややかな目で見つめる。

「はいはい。何であの大尉に惚れてんの？感情薄いし、顔だって中のほんのちょっと上くらいでイケメンとは言えないじゃん。」

「ムッ！私が好きならそれでいいの！」

「はいはい、わかったって。じゃ、その愛しの大尉が呼んでるから、とっとと行ってきな。」

そう言うと、エリーはアヤの脇をすり抜けコクピットの中へ入っていった。アヤもライトに呼ばれてると知り、素早く機体から降りる。

「アヤ！アヤ・メイソン！」

丁度床に足を着けた時、遠くの方からアヤを叫ぶ声が聞こえてきた。彼女の名を叫んだのは、黒髪のショートに人懐っこい顔立ちの青年であった。その青年は人懐っこい笑みを浮かべながら駆け寄る。

「え？コウタ？コウタ・ヤマブキ？」

その青年の名は《コウタ・ヤマブキ》という、地球連邦軍ティターンズ所属の少尉である。アヤとは訓練生時代からの同期で、同じアジア系という事もあって、何かと相談しあえる気の合う親友である。

「久しぶり！」

「久しぶりコウタ！あんたこの基地にいたの？気付かなかった…。」

アヤがこの基地に配属されて数日経つが、全く気付けなかった自分に情けなさと、コウタに対しての申し訳なさを感じた。

「まぁ、無理ないよ。ここ数日、ちょっとヨーロッパへ遠征に言ってたからね。」

「ヨーロッパに遠征？何しに？」

「それは秘密。まぁ、言うなれば残党狩りかな…。」

と、アヤの問いは何となくはぐらかされた。しかし、一瞬コウタの顔に影が見えた事から、ただの残党狩りでは無かったのかもと、彼女はそれ以上は追求しなかった。

「でも元気そうで良かった。ティターンズを除名になって、あの特命部隊に配属されたって聞いてたから、落ち込んでるかなって思ってた。」

「特命部隊？あぁ、特別命令遊撃部隊の略ね。」

特別命令遊撃部隊は、基地の中では《特命部隊》と略されているようだ。そんな事もアヤは気付いてなかった。

「あの部隊、人材の墓場って言われててね、そこに配属された人間はことごとく辞職していくんだって。」

「え？そうなの？」

「知らなかったの？そこの部隊長、ライト・グレイディ大尉だっけ

？その大尉に耐えきれなくて辞めるんだって。」

アヤは自分の耳を疑った。確かにライトは愛想があまりなくて、ハッキリ言って何を考えているのかわからない人物だが、少なくとも彼女の彼に対しての評価はかなり高い方である。

たとえ仕事が雑用だろうと嫌な顔１つせずテキパキ取り組み、暇な時間が多い時は自分に演習の機会を与えてくれる。そして何より、彼女のピンチにたった１人で駆けつけてくれた。そんな彼に、彼女はたとえ恋愛感情があるにしろ、上司として人間として尊敬しているのは確かである。

「もしかしたら、アヤが最高記録かもね。…と、あんまりウダウダ話してると、隊長に大目玉喰らっちゃうから、また今度ね。」

そう言うと、コウタは人懐っこい笑みを浮かべ去っていった。

「うん…、また今度…。」

アヤは力無くコウタを見送った。

ＦＩＬＥ：４　アジアの旧友（後書き）

次回はジオン側にスポットを当ててみます。

ＦＩＬＥ：５　サイド３（前書き）

今回はジオン側を中心に書きました。上手く書けたか不安ですが…。

FILE：5　サイド3

ここは月の裏側で地球より最も遠いコロニー《サイド3》。サイド3と言えば、《ジオン公国》の発祥地として知られている。《一年戦争》末期では、サイド3の3バンチコロニー《マハル》にて強制疎開が行われ、決戦兵器（ソーラ・レイ）に改造されるなどあったが、今は《ジオン共和国》となって観光地にもなっている。

そのサイド3に住む、《ジオン共和国軍》所属大尉（ナイト・サンダーランド）は、自信の機体《MS－14B　高機動型ゲルググ》の整備に立ち会っていた。ナイトという名前であるが、女性である。スペルも、騎士の《Knight》ではなく夜の《Night》である。この機体は接近戦用にカスタマイズされており、かなり高性能。武装もそれに準じたモノになっている。開発されたのは一年戦争末期なのだが、パイロットの技量と合わさって7年近く経った今でも十分戦力になる機体である。ただ、時間が経ちすぎた事もあり、維持に少し手間がかかるようだ。

「…破棄か…」

ナイトは無意識に呟いた。機体の置かれている状況を整備兵から聞かされた時、思い浮かんだ言葉であろう。

「残念ですが…。何せ、この機体は特殊なカスタマイズが施されていますから、維持費が…。」

整備兵は名残惜しそうに説明する。

特殊なカスタマイズ。それは、《マグネット・コーティング》という技術のこと。マグネット・コーティングとは、センサーの精度や、駆動部分・関節部分の駆動力・機動力などの向上を図るための

改良作業のこと。その名の通り、関節に磁性材料を塗布して磁気反発で摩擦を低減させる。そうする事で、機体の反応速度や機動性を向上させるそうだ。

「仕方ないか…。コイツとは一年戦争からの相棒なんだがな…。」

ナイトは機体の装甲に触れ、頭部に目をやる。メインスイッチが入っていない事もあり、モノアイは光を失いゲルググは眠っているかのような静けさに包まれていた。

「まぁ、そんな直ぐに破棄されるわけではないですから、ここにいる間はしっかり面倒見させて貰いますよ。」

整備兵は落ち込むナイトを励ますかのようにそう言った。

「頼む…。」

それだけ言うと、ナイトは体を浮かせ機体から離れた。

彼女にとって、この機体は特別だ。一年戦争からの相棒だけでは無く、もっと大切な思い出があるのだ。

「……」

格納庫を出る扉まで着くと、もう一度ゲルググへ振り返り機体を見つめる。やはり眠っているようだ。そして格納庫を出ようと体を翻したのと同時に、けたたましくアラームが鳴り響いた。

『哨戒中の部隊より救援要請！第０３ＭＳ小隊は出撃されたし！』

「敵？」

それはサイド3近辺に、敵が出現したとの警報であった。そして《第０３ＭＳ小隊》は、ナイトが小隊長を勤める小隊である。
彼女は無意識の内に素早く床を蹴り、ゲルググへ体を流す。

「大尉！いつでも行けますよ！」

「よしっ、出撃する。」

ＧＯＯサインを出す整備兵を目の端に収め、ナイトはコクピットへ頭から飛び込む。地球ではそんな事をすると頭をぶつける羽目になるのだが、無重力故、頭から入っても中で体制を立て直せるので問題はない。

「行こうか…相棒。」

呟くと共にメインスイッチを入れ、出撃の準備を整える。それと同時に、さっきまで眠っていると錯覚させるような静けさを取り払い、ゲルググは頭部のモノアイをギロリと光らせる。そしてゆっくりとその巨体を動かす。

FILE：5　サイド3（後書き）

次回は戦闘メインで頑張ります。

ＦＩＬＥ：６　楽すぎる戦闘（前書き）

今回はやたら長ったらしくなった気がします…。
後、どうでもいい事ですが、ナイトのセリフの書き方を若干変えました。

FILE：6　楽すぎる戦闘

ナイト・サンダーランドは、久々の戦闘と最後の戦闘になるかもしれない事もあり、人知れず奮起していた。そのお陰で、自分の部下を忘れて出撃していた。

サイド3を出撃してしばらく、ナイトは高機動型ゲルググのコクピットを懐かしむように眺めていた。高性能機と言えど、所詮は大戦末期の機体。それ以降は目立った改修も行われておらず、コクピット内は4枚の平面パネルに囲まれた《フラットモニター式》のままだ。お世辞にも乗り心地が良いとは言えないが、それが彼女には逆に心地よいのかも知れない。武装も大して変わっていない。しかし、別の意味では少し変わっている。見た目でわかるのは、そのシールド。それは、グフカスタムと同じく《6銃身75mmガトリング砲》になっている。他にもグフカスタムと似通った装備になっている。何故そうなったかは簡単。接近戦用に改修して行く中、地上でのグフタイプの接近戦闘の戦果、主に《ランバ・ラル》などのエースパイロットの戦果を考慮すれば、グフタイプの装備が一番らしい。とは言え、かなりの操縦技術が必要な為、試験的に少数生産されたのみに終わった。その1機が彼女の高機動型ゲルググであった。

「ま、昔の話しか…。」

と、その時。遅れて出撃して来た《MS－14A　ゲルググ》と《MS－06R－2　高機動型ザク後期型》と合流する。それと同時に、1枚のモニターの隅の方に2人分の顔が映った。1人はゲルググのパイロット、ブロンドの長髪の女性、もう1人は高機動型ザクのパイロット、茶髪の短髪の男性という第03MS小隊の隊員。2人共、一年戦争を生き残ったエース級パイロット。階級はどちらも中尉。どちらの機体も高機動型ゲルググと同じく旧式だが、それ

でも戦力には十分だ。ゲルググに関しては、索敵や通信能力を向上させ、オペレーターの役割も担っている。

『隊長！置いてかないで下さいよ！』

モニター越しにシュートが呆れに近い怒声で呼び掛ける。この時初めて、自分だけが先行していたと気付いたとか。

「あ、忘れてた…。」

ナイトは特に悪びれる様子無く言葉を返す。

『頼んますよ…。』

『隊長、その高機動型ゲルググが破棄されるって、ホントですか？』

次にフェアリーが複雑な顔をしながら問い掛ける。どうやら、既に噂になっているようだ。

「今すぐにって訳では無い…。それまでは世話になる…。」

ナイトの答えにフェアリーは『そうですか…』と、消沈した声を漏らした。

「ん…？そろそろ戦闘エリアに入る…。」

その一言で、２人の顔に緊張が走った。

「情報によると、敵勢力は不明…。貨物船を襲ってる所、哨戒中の第０１守備隊と戦闘に入ったそうだ…。」

『海賊ですか？』

シュートの問いに「恐らく…。」とだけ返し、コクピット内の計器に目をやる。ミノフスキー粒子濃度が戦闘数値まで達しているのを確認すると、次いで全面のモニターに映る宇宙空間へ目をやる。実景の宇宙では無い。方位を示す星座の光が強調されており、実景より明るめに映されＣＧ補正された宇宙だ。

すると、モニターの一角に小爆発が膨れ上がった。そして、その爆煙の中からモビルスーツが３機現れた。

『敵機確認！ドムタイプ３！』

フェアリーの言葉を頭に入れつつ、ナイトも敵のデータを照合する。それにより、敵機が《ＭＳ－０９Ｒ　リック・ドム》とわかった。

「第０１守備隊はどうした…？」

『全機戦闘不能ですが、パイロットは生存しています！』

「わかった…。何時もの手で行くぞ…。トップは私が取る…。」

『『了解！』』

ナイトの指示を出すと同時に、彼女は自身の機体を全身させる。それに気付いたリック・ドムは、担いでいるジャイアント・バズを撃ち放ちつつ、縦一列になりながら突進する。

「ジェットストリームアタックか…。」

ナイトはバズーカ弾を紙一重で避けつつ、敵の戦法を分析した。《ジェットストリームアタック》とは、大戦時《黒い三連星》と呼ばれたジオン公国のパイロットが使った攻撃フォーメーションだ。まずモビルスーツが縦に連なり、全面から見ると1機に見えるように攻撃対象へ思わせる。そしてそのまま接近し、順に攻撃を与えるフォーメーション。

彼女も《ルウム戦役》で見たことがあった。あの時の素晴らしい動きが、彼女を非常に感動させた事は言うまでもない。

「だが、使い慣れて無いようだな…。」

その言葉通り、敵のリック・ドムの動きはどこかぎこちない。恐る恐るといった感じで、全く気迫が感じ取れない。

「その程度で…」

ナイトは一撃目と二撃目を余裕でかわし、最後の1機のリック・ドムへ向き合う。その瞬間、リック・ドムがバズーカ弾を放つより早く、高機動型ゲルググの袖口より《ヒートワイヤー》をリック・ドムの腕へ発射させる。

「この私を…」

次に磁力でワイヤーをくっつかせ、勢い良く手繰り寄せる。それにより、一瞬遅く発射したバズーカ弾があらぬ方向へ飛んでいった。本来の用途は電流により戦闘不能にするのだが、それには時間が掛かってならない。故に、こういう使い方をしているのだ。

「倒せると思うな…！」

そして空いた左手に《ビーム・ナギナタ》を装備させ、片刃だけプラズマの粒子束を形成し、リック・ドムの胸部を貫く。それにより爆発はしなかったものの、完全に戦闘不能へ陥らせた。
ジェットストリームアタック擬きを破られた事に焦った他のリック・ドムは、慌ててジャイアント・バズをナイトへ向ける。しかし、そこからバズーカ弾は発射される事は無かった。

『随分マヌケね！』

『こんなアッサリ引っ掛かるなんざ！』

その声と共にゲルググと高機動型ザクが現れ、それぞれ装備しているザク・マシンガンを撃ち放ちジャイアント・バズを破壊した。
これが第０３ＭＳ小隊の得意とする戦法の１つ。１機が敵を攪乱させる為に懐へ飛び込み、残った２機が時間差で攻撃する。しかし、攪乱役の１機にはかなりの負担になるが。

「終わりだ…。」

その直後、素早く機体を反転させたナイトは、ビーム・ナギナタを二振りしリック・ドム２機を切り裂いた。切り裂いたと言ってもコクピットは無傷で、戦闘不能にしただけだ。

『敵勢力の沈黙を確認！やりました！』

「随分、楽だったな…。」

ナイトはフェアリーの歓喜の声を耳に入れながら、思った程手応えの無かった事に疑問を浮かべていた。

（こんな奴らに第０１守備隊はやられたのか…？ま、何にせよ、コイツにはお粗末な相手だったな…。）

『敵機接近！注意を！』

「何だ…！？」

そんな事を考えていた最中、突如として敵機の接近を知らせる警報が鳴り響き、フェアリーの叫び声で現実に戻された。

「どこだ…下か…！？」

次の瞬間、回避行動をとったナイトの機体をビーム兵器の火線がかすめた。

ＦＩＬＥ：６　楽すぎる戦闘（後書き）

次回も戦闘メインかと…。

因みに、言うまでもなくナイトの高機動型ゲルググはオリジナルです。

ＦＩＬＥ：７　相応しい戦闘（前書き）

今回も戦闘メインです。キャラが潰れた気が…。

ＦＩＬＥ：７　相応しい戦闘

ナイト・サンダーランドは、敵との戦いに喜びすら感じていた。
回避行動をとった一瞬後、さっきまでいた場所に真下から複数の火線が飛び込んで来た。後数秒遅ければ、確実に蜂の巣になっていたであろう。その事に肝を冷やしつつも索敵を行う。その結果、敵機が《ＭＳ－１４Ｆ　ゲルググＭ》だとわかった。しかも、たった１機のみ。とは言えさっきのリック・ドムとは違う気迫が感じ取れる。恐らくエース級のパイロットが搭乗しているのであろう。
そんな分析をしている最中、ゲルググＭは続けざまにビーム・ライフルをナイト目掛け撃ち放つ。彼女も回避行動をとりつつ左腕に装備した、ガトリング砲を撃ち放つ。ゲルググＭの狙いは彼女のようだ。恐らく、隊長機から最初に倒そうとする魂胆なのであろう。

「少しは出来るようだな…。」

そう言った後、無意識に唇がわずかに吊り上がった。

『隊長！援護します！』

ゲルググと高機動型ザク後期型が援護に入ろうとするが、ナイトは片手で制止した。

「必要ない…。私１人で十分だ…。」

それだけ言うと、ビーム・ナギナタを右手に持ち替え両刃にし、スラスターを噴かし距離を詰める。それを阻止しようと、ゲルググＭはビーム・ライフルと《１１０ｍｍ速射砲》で弾幕を張る。しかし、ナイトはその弾幕の中を縦横無尽に駆け巡り一気に距離を詰め

た。

「お前は、楽しませてくれるだろ…？」

呟くと同時に不気味な笑みを浮かべ、ナギナタを振り下ろす。いち早く反応したゲルググMは素早く後ろへ下がり、そのナギナタの一閃を紙一重で回避した。

それが更にナイトを喜ばせた。

（これだ…！この臨場感こそ、コイツの最期の戦いに相応しい…！）

一閃をかわしたゲルググMは、そのまま後退するのではなく、ビーム・サーベルを振りかざし切りかかって来た。

「フッ…」

マグネット・コーティングされているからか、それともナイトのパイロットとしての技量なのかはわからないが、振り下ろされたビーム・サーベルを易々とかわし背後へ回り込んだ。しかし、それ以上は何もせず敵機が振り向くのを待った。

（直ぐに勝っては面白くない…。もっと楽しんでからだ…。）

胸中で呟くとナギナタの一閃を放つ。敵機はそれをビーム・サーベルで受け止めた。反発により放たれた残粒子が火花のように散ると、敵機は素早く距離をとりビーム・ライフルを構え引き金を引く。銃口から放たれた火線は真っ直ぐナイトへ向かう。

「甘いな…。」

ナイトはわずかな挙動でそれをかわすと、スラスターを焚き敵機へ向かわせる。敵機も火線を張りつつこちらへ向かって来た。その行動を見て（やる気か…？）と胸中で問いかけると、「面白い…。」と声に出して呟いた。

「覚悟はあるだろうな…！？」

そう叫ぶと共に、右の袖口からヒートワイヤーをゲルググMの腕へ発射する。敵機はそうはさせまいとビーム・ライフルをワイヤー先端へ投げつけた。その結果、ヒートワイヤーはビーム・ライフルをキャッチするのみに終わった。

「小賢しいマネを…！」

思惑が外れた事に腹を立てつつも、「だが、そうでなければな…！」と狂喜の声も漏らした。

ナイトがヒートワイヤーに捕まったビーム・ライフルをどこかへ放り投げると、敵機のビーム・サーベルが振り下ろされた。

「これ以上は楽しめないか…。」

ナイトはまた素早い動きでビーム・サーベルをかわし、ナギナタで敵機の右腕を溶断した。そして振り向きざまに今度は左腕を肩からごっそり切り落とす。

「ま、ちょっとは楽しめたかな…。」

そして無防備になりフラフラ漂うゲルググMの頭部を鷲掴みにすると、コクピットを貫いた。

ＦＩＬＥ：７　相応しい戦闘（後書き）

次回はアヤ目線に戻ります。

FILE：8　合同任務（前書き）

あんまり上手く書けた気はしませんが、新たな展開になります。

FILE：8　合同任務

アヤ・メイソンはスポーツ全般好きだが、その中でも特に剣道が好きだ。

出身国《日本》にいた時から、暇さえあれば竹刀を振っていた。特に嫌な事があったりすると、よく稽古をしていた。そのおかげもあって、学生時代にはアヤの右に出る者はいないと言われていた程である。それは軍事学校に入ってからも変わりなく、他は兎も角剣道では誰にも負けなかった。しかし、その剣道の技術は実戦に活かされる事は無かった。モビルスーツでの戦闘時はもっぱら射撃に専念していた。前に一度、部隊長であるライト・グレイディに「何故君は剣道の技術を取り入れないんだ？」と、質問された事があった。その時の彼女の答えは、「実戦と演習では違いますし…」であった。それから、「隊長みたいに強くもありませんから…。」と続けた。

それは、敵機とのゼロ距離戦闘が怖いからという意味である。剣道とは違い、一歩間違えば死んでしまうという恐怖からそうなったのであろう。しかし、それは人として正常な反応なのであろう。誰しも死ぬのは嫌だ。少しでも安全な道があるならば、その方を選ぶのは当たり前だ。

しかし、今はそんな事など考えずに無心に竹刀を振っている。特に何があったわけでも無く、特に何もないから振っているのだ。

「ふぅ～、今日はこの辺にしとこっかな。」

竹刀を下ろしたアヤの顔は、どこかスッキリしたような清々しさがあった。仕事が無いというのも、なかなかストレスが溜まるようだ。

素振りを終えた彼女は、シャワーを浴びて更衣室にて着替えを済ます。そして更衣室を出た瞬間、部隊長であるライト・グレイディ

と鉢合わせした。

「隊長？何してるんですか？」

「君を待ってた。」

（え！？隊長が私を！？）

ライトは無表情に答えたが、アヤにとってはとても嬉しかった。前回、旧友コウタ・ヤマブキに言われたライトの評価だが、彼女は気にしない事にした。他人がなんと言おうと、好きな人は好き。そう思う事にしたようだ。

「アヤ・メイソン少尉。直ぐに荷物をまとめろ。」

「は？」

ライトは無表情ながら急に真面目な顔をし、そう言った。それを聞いたアヤは、こう思った。

「わ、私クビですか！？」

しかし、「バカか君は」の一言で片付けられた。

「遠出だ。２時間後に出発。任務の内容は後で話す。遅れるなよ。」

そう言うと、ライトはツカツカと去って行く。すると、一瞬アヤへ振り返り何か言おうとしたが、少し迷って「…まぁいいや。遅れるなよ。」と言ってまた歩き出した。

「は、はい！」

アヤはそんなライトの背中へ、元気な返事を返した。

しかし、いきなりの遠征とは一体何事であろうか。もしかしたらやりたくような任務かも知れない。そう思うと、途端に彼女の中に不安が芽生え始めた。

とは言え、命令には従わなければならない為、アヤは手っ取り早く準備を済ませ格納庫へと急いだ。

「お待たせしました！」

「ん？来たか。」

格納庫では、ライトが3人の見知らぬ男女と何やら話し込んでいた。その中には、新人整備士のエリー・タウンゼントも紛れ込んでいた。彼女は何やら楽しげに話している。

「あの、その人達は？」

しかし、アヤが一番気になったのは、その3人が軍服姿では無いと言うことであった。1人は茶髪で短髪の若い男性で、私服にジャンパーを羽織ったラフな格好で、もう1人はスーツ姿のブロンドで長髪の若い女性、そして最後の1人もスーツ姿で赤毛の長髪で右目だけが隠れている若い女性であった。そしてその赤毛の女性は、ライトとやけに密着している。

「連邦捜査機関の方ですか？」

アヤは思い当たる部署の名を口に出した。確かに連邦捜査機関にはスーツ姿の捜査官が多い。

「いや、彼女達は…」

「私達はジオン共和国の者だ…。とある任務の為、貴殿ら特別命令遊撃部隊と行動を共にする事になった…。」

ライトの言葉を遮り、赤毛の女性が説明する。

「ジ、ジオン！？」

アヤはとても驚いた。まさか連邦軍の基地にジオンが足を踏み入れているなんて、普通じゃ有り得ない。

「アヤ・メイソン少尉ですね？」

「は、はい…。」

驚愕しているアヤへ、今度はブロンドの女性が話し掛ける。

「自己紹介がまだでしたね。私達はジオン共和国軍、第０３ＭＳ小隊の者です。私はフェアリー・ハロウェイ中尉。そしてこっちは…」

「シュート・シェパード中尉だ。よろしく。」

ブロンド女性はフェアリー・ハロウェイ、茶髪の男性はシュート・シェパードと名乗った。２人共気さくそうでアヤは少し安心した。

「私は第０３ＭＳ小隊の小隊長、ナイト・サンダーランド大尉…。よろしく…。」

そして最後に、赤毛の女性はナイト・サンダーランドと名乗った。彼女は無表情であるが、アヤには無愛想とは違う”ぽややん”とした優しいオーラを感じた。

しかし、ジオン共和国軍の人間が一体何をしに来たのだろうか。そして、ライトとはどういう関係なのであろうか。アヤには前者より後者の方が気になってならない。

ＦＩＬＥ：８　合同任務（後書き）

次回、任務の全容が明らかになるはず。

ＦＩＬＥ：９　謎多き任務（前書き）

今回はちょっと新しい目線で書いてみました。

ＦＩＬＥ：９　謎多き任務

ライト・グレイディは《ミデア輸送機》の中で物思いにふけていた。

隣にはつい先程合流したジオン共和国軍第０３ＭＳ小隊の小隊長、ナイト・サンダーランドがライトの膝を枕にし眠っている。（何故彼女がライトにくっ付いているかは、また別の機会に説明しよう。）ライトは彼女の寝顔を見る度、胸の鼓動が速くなるのに違和感を感じながら、ふと周りを見渡した。さっきまでちょこまか動き回っていたアヤ・メイソンは、疲れたのか自分の向かいにあるイスに座り眠っていた。そう言えばまだ何も説明してないなと思いながら、アヤとナイトの寝顔を見比べてみる。

ナイトに比べればアヤの寝顔は子供のように無邪気だ。だらしなく開いた口や、絶妙なバランスでずれ落ちずイスに収まっている姿を見れば、誰だって子供っぽく見える。それに比べ、ナイトは実に綺麗な寝顔だ。上手くは表現出来ないが、崩れの無い姿勢や細やかな寝息、まさに隙の無い寝顔である。

とは言え、動けないから困ったものだ。これではコーヒーすら飲めない。かと言って無理矢理起こすのは可哀想だ。

「ヤレヤレ…。」

どうしょうも無いこの状態でライトが出来る事と言えば、今回の任務内容を再確認する位だ。

今回の任務。それは、内密に命令された任務であった。内容はジオン残党軍の基地を強襲し、あるモノを捜索する事である。それが何なのかはアヤには説明していない。する前に寝てしまったからだ。本来なら虱潰しに探さなければならなかったのだが、ナイトが有力な情報を持ってきてくれたおかげでその必要は無くなった。彼女の

話しによると、宇宙で捕獲したジオン残党軍を尋問した結果、とある作戦が行われようとしている事がわかったそうだ。
作戦名は《ＥＸＯＲＣＩＳＭ　ＯＰＥＲＡＴＩＯＮＳ》というそうだ。直訳すれば、恐らく《悪魔払い》という意味だ。作戦内容は大体予想がつく、決して穏やかでは無い。
それは兎も角、彼が気になったのはジオン共和国の人間であるナイトらがどうして地球にこれたのかだ。普通なら有り得ない出来事だ。それにボディチェックすらされていないのは、ただ迂闊なだけなのか。何はともあれ、今回の任務には謎が多い。
と、その時。膝の上で動きがあった。

「ん…うぅ…ライト…。」

ナイトが目を覚ましたのだ。しかし、膝から離れようとしない。

「悩み事か…？」

ライトの顔から読み取ったのか、ナイトは手を握りながら問い掛ける。

「いや、何でもない。」

「そう…。」

と、その時。「くたびれた～。」という呑気な声でナイトの部下、シュート・シェパードが入ってきた。

「…っと、お邪魔でしたかね？」

ライトとナイトの状況を見たシュートは、からかうような言葉を

掛ける。

「いや。」「邪魔…。」

２人の返事はほぼ同時だったが、ライトは否定しナイトは肯定とまるっきり逆であった。

「う～…小籠包！」

そんな中、眠っているアヤが何やら叫んだ。

それが寝言だったとは、一瞬誰も気付かなかったとか。

ＦＩＬＥ：９　謎多き任務（後書き）

今回はライト目線で書いてみました。いかがでしたか？
しかし、ライトの一称が決まらないのが悩みです。キャラも若干ふわふわしてるし…。

ＦＩＬＥ：１０　コーヒーブレイク（前書き）

今回は新しい登場人物が出ますが、そんなに意味の無い話しです。

FILE：10　コーヒーブレイク

とある山岳地帯にある、ジオン残党軍の基地。そこでは、何やら兵士達が騒がしく作業をしていた。どうやら大掛かりな作戦が始まるようだ。

「ブツは慎重に扱え！死にたくなければな！」

「モビルスーツ隊はいつでも出撃出来るよう準備しておけ！」

格納庫では大隊長や整備士長などの怒鳴り声が響いている。

その基地に所属するテック・Ｄ・マクガニル大尉は、他の兵士達が慌ただしく準備する中、１人優雅にコーヒーブレイクを楽しんでいた。

「活気があっていい雰囲気だこと。」

そんな事を呟いては、また一口コーヒーを啜る。そんな彼に近づく人物がいた。

「マクガニル大尉。何してるんです？」

その人物は２０代半ば位で茶髪の男性であった。

「見ての通り、コーヒーブレイクだ。お前も一杯どうだ？マイケル少尉。」

「じゃ、お言葉に甘えて。」

《マイケル》と呼ばれたその男性は、テックからコーヒーを受け取り適当なイスに座る。

「お前は確か基地に残るんだったな？」

「えぇ、はい。熱っ。」

マイケルはコーヒーを啜りながら答える。まだ熱かったようで、一瞬顔をしかめた。

「なら、俺の機体を使え。」

「は？」

マイケルはコーヒーを飲む手を止め、テックの顔を探るように見る。

「俺にはもう必要ない機体だし、信頼できる奴に任せたい。」

「それが俺ですか？」

「あぁ、お前なら俺の機体を使いこなせるだろう。」

そう言うと照れを隠すかのように、テックは残りわずかになったコーヒーを一気に飲み干した。

「頼んだぞ。…よっ！」

空になったコーヒーの容器をゴミ箱へ投げ入れると、「よしっ！」と言う言葉と共に腰を上げ戸口へと歩き出す。

「大尉、ご武運を。」

マイケルは立ち上がり、そんなテックの背中へ向け敬礼をする。テックはそれに応えるように右手をひらひらさせ、休憩室を出て行った。

テックが出て行ってしばらく、マイケルはコーヒーを飲み終え格納庫へ向かった。そこではまだ怒鳴り声が響いている。すると、さっきから怒鳴っていた整備士長がマイケルに気付いた。

「マイケル！マクガニル大尉から話は聞いているな！」

「はい。」

「ならボサッとしてないで今すぐ機体の所へ行け！」

怒鳴る整備士長に右手で応えたマイケルは、鬱陶しいと思いながらテックの機体まで歩いて行く。

基地のモビルスーツは終戦から時間が経った割にはなかなか多彩である。ザクやドム系統などの主力機は勿論、近くに湖がある関係からか《ＭＳＭ－０３　ゴッグ》や《ＭＳＭ－０７　ズゴッグ》、《ＭＳＭ－０４　アッガイ》なども多数ある。

そんなモビルスーツ隊の中に、これから彼が乗る機体がある。《ＭＳ－０８ＴＸ／Ｄ　イフリート・ダガー》がその機体だ。《ＭＳ－０８ＴＸ　イフリート》の改修機にあたり、見た目こそ大した変化は無いものの、接近戦用に更なる改修をし武装もそれに準じたものになっている。

「コイツが新しい相棒か…。よろしくな。」

丁度タイミングよくメインスイッチが入ったのか、マイケルの言葉に応えるかのようにイフリートのモノアイがギラッと発光した。

ＦＩＬＥ：１０　コーヒーブレイク（後書き）

次回も新たな登場人物が…

ＦＩＬＥ：１１　作戦会議（前書き）

新しい登場人物を出す予定でしたが、少し先延ばしにする事にしました。

FILE：11　作戦会議

ライト・グレイディは、この状況をどう説明しようか迷っていた。何故なら、対面してから今までナイト・サンダーランドが引っ付かれて離れないからだ。この状況を見て疑問を浮かべない人物はいないであろう。実際、彼の部下アヤ・メイソンをはじめとした多数の人物が疑問を浮かべている。ナイトの部下ですらだ。ちょっと色々複雑なのだが、別に2人は恋仲な訳では無い。ただ単に、彼女がライトの事を気に入り引っ付いているだけだ。彼女がライトを気に入ったのかについては、ライト自身全くわかってない。

しかし、今すぐ説明するわけではないので、まだ考える余裕はある。作戦前は部隊長としての立場を利用すれば、いくらでもはぐらかす事ができるのだ。これも職権乱用に当たるだろうか。

「これより作戦を説明する。今回の作戦目標は、連邦から奪取されたあるモノのを奪還する事だ。敵の殲滅も命じられているのだが、個人的には、それが奪還できしだい撤退したい。いいか？」

その言葉に異論を唱える者はいなかった。それもそうであろう。第一、モビルスーツ5機で基地を抑えるなどできなくも無いが、無茶な話しだ。

「礼を言う。目標地点に着きしだい、敵基地の数キロ離れた場所に降下し、2チームに分かれ二手から攻める。」

ライトは赤ペンで地図に丸をつけながら説明する。地図は戦前の物だが、土地に大した変化は無い。湖がある事も切り立った山がある事も同じだ。

「チーム名はエイブルとブラボー。ブラボーチームはサンダーランド大尉をリーダーとし、ハロウェイ中尉とメイソン少尉、ホバーにタウンゼント技術少尉を含めた４人とする。エイブルチームは…」

「な！？俺はオッサンとかよ！？」

ライトの先の言葉を読み、シュート・シェパードが不満そうに叫んだ。それに対しライトは、「オッサン言うな。」とだけ返し、ナイトの「私ライトと一緒がいい…。」という呟きは無視した。

「ブラボーチームは敵基地を全面より強襲。」

「あの…、何を奪還するんですか？」

作戦内容を聞いていたアヤが恐る恐る手を上げた。忘れていたわけでは無いが、彼女にはまだアレが何なのか説明していない。しかし、あえて「知る必要のない事だ。」と流す。

「エイブルチームは混乱に乗じ基地内部に潜入。目標物を奪取する。」

「潜入ね。７年ぶりだな。」

シュートは懐かしげに呟いた。第０３ＭＳ小隊隊員の経歴等はナイトから聞いている。シュートはモビルスーツパイロットになる前、スパイとして活動していたそうだ。フェアリーはオペレーターからパイロットに転身。

「その後、この地点まで撤退。ミデアに回収してもらい、戦域を離脱する。」

また地図に赤丸を書き入れ、全員の顔色をうかがいながら「質問は？」と問い掛ける。すると複数手が上がったが、ライトはエリー・タウンゼントを指差した。

「私、オペレーターの経験なんて無いんですけど？」

「必要ない。オペレーターはハロウェイ中尉が行ってくれる。」

「じゃあ、何すればいいんですか？」

「通信の中継やできれば索敵をしてもらいたいのだが、まぁ君は君の仕事をすればいい。他には？」

次にライトはフェアリー・ハロウェイを指差す。

「勢力はわかってるんですか？」

「不明だ。しかし、近辺の基地に問い合わせたところ、小さい基地らしいがかなりの戦力があるらしい。」

「他に基地を襲撃する部隊は？」

「我々だけだ。”勝手にやってくれ”だそうだ。」

厄介な事には巻き込まれたくない、というのが見え見えだ。何にせよ、増援は見込めない。

「他には？…無いなら、到着時間まで約1時間。出撃準備にかかれ。」

「「了解。」」

「了解…。」

ライトの言葉と同時にそれぞれ機体へ向かう。その途中、エリーの「大尉！」という言葉にナイトと共に足を止めた。

「どっちだ？」

「サンダーランド大尉になんですけど、グレイディ大尉もいてください。えっと、ジオン製の機体なんですけど…」

ナイトがサイド3から整備士を連れて来なかったおかげで、エリーがジオンのモビルスーツも面倒をみる事になった。

「補給とか、連邦製のモノでいいんですか？」

「構わない…。補給する必要は無いかも知れないし…。」

確かに1発で作戦が成功すれば問題はない。

「確かにそうですが…。後、パラシュートも連邦製で、無理やりくっつけちゃって…」

「使えないの…？」

「使えるには使えますが…」

「なら、問題ない…。」

案外あっさりしている事にエリーは目を点にしたが、ナイトもジオン製の補給は受けられない事くらい十分わかっている。

「いいんですか…。」

どこか腑に落ちない顔をしているエリーに、ライトが「そんなもんだ。」と言って肩を叩いた。おそらく彼女は、無理難題を言われると思っていたのであろう。

「出撃準備だ。行こう。」

「はい。」

到着時間まで約57分。

今回は任務は編成されたての部隊としては、ハードルの高すぎる任務だ。勢力不明で地の利は敵にあり、更に味方の増援は見込めない。まさに最悪な状況だ。しかし、ライトには何の不安もなかった。その理由は、誰にもわからない。

ＦＩＬＥ：１１　作戦会議（後書き）

私事ですが、全体的なキャラ設定がブレブレで困っています…。
シャキッとしないといけないな…。

ＦＩＬＥ：１２　論争（前書き）

今回、登場人物は２人のみです。
やはりキャラがフワフワしてますが…。

FILE：12　論争

ライト・グレイディは機体の前でヨーグルトを食べていた。
到着時間まで約２０分。時間が進む度に体が堅くなり、神経がイラつく程敏感になってくる。何年パイロットを勤めても、やはり作戦前は極度に緊張してしまう。それは彼だけに言えた事ではない筈だ。頭の中で何度も作戦内容を確認したり、準備に不備がないか必要以上に再確認してしまう。そんな緊張をほぐす為、彼はいつもヨーグルトを食べる。
ヨーグルトはライトの大好物で、遠征の際はいつもコクピットの非常食と共に何種類も兼ね備えている。因みに、今食べているのは《クリーミーレモン》という甘酸っぱい味のモノだ。パッケージに『青春時代の初恋のような甘酸っぱさ』と謳い文句が書いてあるが、イマイチ彼にはピンと来ない味らしく、食べる度に「初恋って、こんな味だったっけ？」と思うそうだ。

「ヨーグルト…か？」

いつの間にか近くにいた、シュート・シェパードが疑問の声を漏らした。

「一口どうだ？美味いぞ。初恋味だそうだ。」

「オッサン、それはキモいぞ…。」

ヨーグルトを勧められたシュートは、１歩後退りながら断った。
ライトは「オッサン言うな。」とヨーグルトを口に含む。

「何か用か？」

「あぁ、あんたさ。潜入とかの経験あんの？」

「まぁ、ギャング相手なら数回ある。」

ライトは特別命令遊撃部隊の任務にて、麻薬や銃器などの売買を行っていたギャング組織に潜入した事がある。

「ギャング！？おいおい、軍とギャングは全く別物だぜ！？特にジオンは甘かないぜ！？」

シュートは大袈裟に驚いてみせ、問い詰め始めた。

「そんな事は百も承知だ。だから、プロである君をパートナーに選んだ。」

「そりゃ俺はプロだけど…、ド素人で連邦のオッサンの命令に従うなんざゴメンだぜ！」

「ド素人じゃない。それからオッサン言うな。それに…」

何か言いかけたかと思うと、見透かしたような目をシュートへ向けた。

「君は連邦軍と組むのが嫌なんだな？」

「……」

その問いに直ぐには答えず、「あんたはどうなんだよ？」と逆に質問を返す。

「俺は…俺らはあんたらの敵だったんだぜ？そんな俺らに命を預けられんのか？俺は無理だね。あんたの事を信用できねぇ。」

シュートの言うことはもっともだ。年月が経ったとはいえ、かつては命のやり取りを繰り広げた敵同士であった事は変えようのない事実である。お互い戦時中ということで、目を逸らしたくなるような酷い事もして来た。嫌悪もあれば募り募った憎しみもあるだろう。

しかし、そんな彼の問いにライトは「バカか君は？」の一言を返した。

「何？」

「そんなに嫌なら無理して一緒に来る必要はない。君はブラボーチームと共に基地の強襲にあたれ。」

ライトはヨーグルトをかき寄せながら無表情に答えた。予想外の返答だったのかシュートは目を点にしながらライトを見つめる。

「君が連邦を嫌ってようと何であろうと、この任務に就くことを選んだのは君自身だ。断る事も出来た筈だろ？違うか？」

責めるような口調であるが、ライトの言うことは正論であった。

「そんな気持ちで任務にあたってもらっては困る。成功するモノもしないだろう。はっきり言って足手まといにしかならない。」

「足手まといだぁ！？」

「さて、後１０分弱か…。そろそろ機体で待機しろ。」

ヨーグルトを食べ終わると、腕時計を確認し機体へと向かう。その途中、空になった容器をゴミ箱へ投げ捨てた。容器は見事な弧を描きながら中へ吸い込まれる様を見て、我ながら見事なシュートだとライトは心の中でガッツポーズをした。

「何だよ…うぜぇオッサン…。」

シュートは聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟いたが、ライトにはしっかり聞こえており「オッサン言うな。」と返した。勿論、シュートはビクッと体を震わせた。

FILE：12　論争（後書き）

次回、いよいよ作戦開始です。しかし、戦闘があるかどうかは未定です。

ＦＩＬＥ：１３　タイミング（前書き）

今回はジオン残党軍側目線ですが、ほぼ勢いで書いたので上手く書けた自信はないです。

FILE：13　タイミング

夜も深くなって来た山岳地帯は、異様な静けさに包まれていた。いつもなら、時折夜行性の動物が鳴く声が響きわたったりするのだが、この日は少し違っていた。動物達は身の危険を感じたのか、どこかへ姿を隠している。

『第1級警戒態勢！ミノフスキー粒子、戦闘濃度まで上昇！同時に基地の70キロ先に降下物を3つ確認！第1、第2、第3小隊は出撃されたし！』

そんな静けさの中を、基地オペレーターの命令により第2小隊の小隊長であるマイケルは、愛機になった”MS－08TX／D　イフリート・ダガー”を駆り、部下の”MS－06J　陸戦型ザク？”2機と共に森の中を進行していた。　夜中ということで、《ナイト・ビジョン》を使用している。基地近辺の地形は大体把握しているのだが、やはり夜はコレに頼る他ない。ライトを点灯させるわけにもいかないし。

同時に出撃した第1、第3小隊はポイントを取り囲むように進行している。

『全く、なんだってんだ？連邦の演習か、それとも夜襲しようって魂胆か？』

隊員の1人が、めんどくさそうな声を出した。

『さぁな。何にせよ、タイミングが悪すぎるぜ。後ちょっとで落とせたのにな～…。』

もう1人の隊員は女性を口説いていたのか、残念そうな声を出した。

『へっ！嘘つけ！相手にもされてなかったじゃねぇか！』

『馬鹿言え！あぁいうのをツンデレって言うんだよ！』

「任務中だ。私語はは慎め。」

言い争う2人の隊員をマイケルが叱りつけ、隊員は『『スイマセン…。』』と声を揃えた。

確かにタイミングが悪すぎる。今夜テック・D・マクガニル大尉が出発されるというのに、ヘタすれば作戦が延期になってしまう。それだけは避けたい。

「この辺りが降下ポイントだな？」

『我々が一番乗りですね。』

降下物が着地したと思われるポイントに到着したが、パラシュート付きの背負子が散乱している以外、機影はなかった。

『移動したんでしょうか？』

「だといいが、一応周囲を調べるぞ。熱センサーを使え。」

『イエッサー！』

マイケルの指示で隊員の1人が熱センサーを起動した。夜になると昼間の余熱があるものの周りの気温が下がり、スラスターなどで熱を大量に放出するモビルスーツの探知には持って来いの装備だ。

『何の反応も無いっすよ？やっぱり離れたんじゃ無いっすかね？』

「もっと念入りに探せ。何の反応も無いってのは可笑しいだろ？」

確かに、全くの無反応というのは可笑しい。モビルスーツが降りてきた以上、何らかの余熱があるはずだ。

『何度やっても同じっすよ。あ、第1小隊と第3小隊が到着しました。』

隊員の言葉と同時に、左から第1小隊の”ＭＳ－０７Ｂ　グフ”が3機、右から第3小隊の《ＭＳ－０６Ｄ　デザートザク》が3機現れた。

『敵はどうした？』

『見失ったのか？』

それぞれの小隊長が無線で呼び掛ける。どうやらどちらの小隊も、敵とは遭遇してないようだ。

「どういう事だ？確かに背負子は…」

その瞬間、マイケルの脳裏にある可能性がよぎった。

『小隊長？』

「これは…フェイクかも知れない…。」

『フェイク？』

「離れたにせよ隠れたにせよ、モビルスーツが動いたなら木の枝や地面が荒れている筈だ。しかし、そんな様子はどこにもない。」

確かに、マイケル達が来た道には巨大な足跡があったり木々が荒れていたりする。しかし、それ以外にはそんな痕跡はない。ジャンプしたとも考えられるが、それなら誰か気付く筈だ。

「これなら、熱センサーに反応が無いのも納得がいく。」

その推理に第1小隊の小隊長が『まさか…』と焦る声を出した。

『じゃあ、敵はどこだ？』

「敵は…」

言いかけた途端、基地の方で爆発が起こった。『はめられた！？』と第3小隊の小隊長が叫ぶのを横目に、マイケルは機体をいち早く動かした。

だからそう言っているだろと言いたいところだが、今はそんな場合ではない。一刻も早く基地へ戻らなければならない。もしアレに被弾でもすれば、大惨事になる。

「敵はあそこだ。基地へ戻るぞ。」

マイケルは早口にそう言うと、スラスターを炊き一気に夜空へと

飛び上がった。
全くタイミングが悪すぎる。

ＦＩＬＥ：１３　タイミング（後書き）

次回、フルアーマーガンダム・ストライカーの初陣です。

ＦＩＬＥ：１４　作戦開始（前書き）

今更ながら、ミデアにモビルスーツ５機とトラック１両は多すぎるが気が…

ＦＩＬＥ：１４　作戦開始

アヤ・メイソンは自分だけノーマルスーツを着ている事に寂しさを感じた。

ライト・グレイディに着ない方がいいのかと尋ねたところ、ヘルメットを頭に被せながら「心配だから着ていろ。」と言われたから着る事にしたが、やはり仲間外れみたいで寂しいものだ。

さて、つい先程ダミーのパラシュートを落としたのは、ライトが実際の地形を見て思い付いた作戦であった。目的は、言うまでもなく敵戦力を少しでも裂く事であった。

昼のうちに目標地点へ到着したアヤ達は、まず離れた場所に着陸してモビルスーツを降ろした。この時パラシュートを取り外したのだが、ライトがエリー・タウンゼントとフェアリー・ハロウェイに怒鳴られていた事が印象に残っている。パラシュートを外し終えると、森の中を察知されぬよう慎重に敵基地近辺までモビルスーツを歩かせ夜になるまで待機した。夜が深くなると、ミデアにダミーのパラシュートを落としてもらったのだ。その結果、敵の戦力を裂く事には成功した。実際モビルスーツが９機、３個小隊分が出撃しダミーを追って行った。

しかし、基地に残っていた戦力は想像を絶するものであった。アヤ達が察知された時点で、既にモビルスーツが６機出撃しており、今も続々と出撃している。一体なぜこんなに戦力があるのかはわからないが、今はそんな場合ではない。完全に退路を断たれ、取り囲まれてしまっているのだから。しかも、こちらの戦力はブラボーチームのモビルスーツがたった３機のみ。少し離れた場所に《Ｍ３５３Ａ４　ブラッドハウンド》が待機しているが、戦力には数えられない。エイブルチームは別行動をとっている故、こちらも戦力には数えられない。

『ガンダムに…ゲルググだと！？』

敵のブレードアンテナ付き《ＭＳ－０６Ｆ　ザク？Ｆ型》のパイロットの声がコクピットに響きわたった。恐らくオープンチャンネルを開いているのであろう。

『ガンダムは違うが、我々はジオン共和国の者だ…。貴様らに逃げ場は無い…。大人しく投降しろ…。』

”ＭＳ－１４Ｂ　高機動型ゲルググ”のパイロットでブラボーチームのリーダー、ナイト・サンダーランドが説得を始めた。

『共和国だと！？連邦に尻尾を振る犬め…、状況わかって言ってるのか！？』

それはアヤも思った。逃げ場が無いのは、どちらかといえばこちらの方である。

『抵抗するならこちらも反撃する…。無駄な戦いで犠牲者を出したくない…。投降しろ…。』

ナイトはそんな事など気にもかけず説得を続ける。しかし、ザクのパイロットは『誰が投降するか！』と怒鳴り声を返した。

『それは攻撃してもいいという事だな…？』

『は？あ、あぁ…』

『なら、私を楽しませろ…。』

それと同時にナイトはシールドの裏側からヒート・サーベルを取り出し高機動型ゲルググの右手に構えさせ、スラスターを炊き爆発的なスピードで一気にザクの懐まで入り込んだ。そして素早い動きでザクの五体をバラバラに切り刻む。ザクのパイロットはあまりにいきなりな攻撃に反応が遅れ、『うわっ…』と叫びを上げて終わった。

『楽しませろと言っているだろ…！』

ナイトは更に3機のモビルスーツをあっという間に倒して行き、更に手近な敵機を順に襲って行く。その姿はまるで、血に飢えた野獣のようである。

落ち着いて周りを見てみると、四方八方を取り囲んでいた敵機の陣形は、ナイトによって早くも崩れかけていた。これが一年戦争を生き延びたパイロットの実力かと、改めてアヤはその腕前の差を思い知らされた。

『メイソン少尉！私達も応戦を！』

「は、はい！」

思わず見入ってナイトに見とれてしまっていたアヤだが、フェアリーの声で我に帰り操縦桿を握る手に力を込める。その時、敵機の接近を知らせるアラームがコクピット内に鳴り響いたかと思うと、いつの間にか接近していた”ＭＳ－０７Ｂ　グフ”から『ガンダムがぁぁ！』という叫び声が無線機から聞こえてきた。

やはりジオン残党軍にとって、ガンダムは憎しみの対象なのであろう。

「うわっ！？こ、この！」

アヤは反射的に素早く機体を後退させ、ショートバレルのビーム・ライフルから2発撃ち放つ。銃口から伸びたビームの火線は、グフの右腕と胸部を貫いた。

「大丈夫、私だって連邦の仕官だ…。」

倒れたグフからパイロットが這い出て来るのを目の端に収めつつ、アヤは自分に言い聞かせるように呟いた。

これが”ＦＡ－７９［ＦＰ］　フルアーマーガンダム・ストライカー”のパイロットとしての初陣である。

ＦＩＬＥ：１４　作戦開始（後書き）

次回は戦闘メインで書きます。上手く書ければいいのですが、頑張ります。

ＦＩＬＥ：１５　迂闊（前書き）

前半を回想みたいにしたら、かなり長くなってしまいました。
あしからず。

それから、若干タイトルを変更した話があります。

FILE：15　迂闊

ナイト・サンダーランドは、射撃が得意でない。
それは、軍に入った時から苦手であった。宇宙で流通している無反動自動小銃なら、しっかり狙えばどんなに下手でも当たるの筈なのだが、ナイトは動かない的ですら当てる事が出来ない。いつも狙った箇所より、大分右になってしまう。しかし、不思議な事にナイフ投げではかなり好成績であったとか。
何故そうなるのかは不明だが、それのおかげでモビルスーツのパイロットになれた。パイロットになってからも射撃の腕前は相変わらずで、成績は常に最下位若しくは下から何番目。教官や上官から怒鳴られるどころか、呆れられていた事は言うまでもなくないであろう。最も彼女が士官候補生だった時に搭乗していた《ＭＳ－０６Ａ　ザク？　初期生産タイプ》では、その頃まだ《ヒート・ホーク》が装備されてなかった為、彼女の得意とする白兵戦ができず、評価されなかった。もしヒート・ホークが装備してあれば、成績は１位ではなくても上位だったかもしれない。事実、”ルウム戦役”で搭乗させられた《ＭＳ－０５　ザク？》、大戦時では既に《旧ザク》として知られていたが、それにはヒート・ホークがあり、それを駆使した戦法により単機で船艦を２隻沈めるなど、今までに無い戦果を上げた。何故旧ザクに乗せられたのかは彼女自身あまりわかっていないが、恐らく機体数が少なかったからだと思う。
それは兎も角、彼女はルウム戦役を境に着々と戦績を伸ばしていき、地球に降りてから１週間も経たずに、エースパイロットの仲間入りしていた。そして連邦が《オデッサ》を攻撃しだした際には、”ＭＳ－０７Ｂ３　グフ・カスタム”に搭乗しヒートワイヤーと二振りのヒート・サーベルをという専用のカスタマイズを施した機体を駆使し善戦。彼女の努力も虚しく戦局が宇宙になった時には、《ソロモン》では使い慣れた旧ザク、それ以降は今も搭乗している”

ＭＳ－１４Ｂ　高機動型ゲルググ”にて、公式記録では彼女の小隊は無敗を誇っていた。しかし、射撃の腕はイマイチ上達しておらず、戦闘はほとんど接近戦頼みであった。故に、彼女の性格もあってか、無駄に前進し敵に囲まれてしまうなんて事がよくあり、その度にピンチに陥ったとか。

７年経った今でもあまり改善されておらず、相変わらず射撃はドヘタで無駄に踏み込んでしまう。

「またハズれた…いや、当たったか…。」

眼前の”ＭＳ－０６Ｄ　デザートザク”へ向けガトリング砲を撃ちはなったのだが、右に大きくハズれて後ろにいた”ＭＳ－０７Ｂ　グフ”に当たり、見事その装甲を穴だらけにした。

「地上は久しぶりだから、仕方ないという事にしとこ…。」

と自分で自分に言い訳し、周りを見渡した。敵も頭を使い始めたのか常に一定の距離をとり、ナイトを近づけないように包囲している。恐らく射撃が苦手だとバレたのだろう。

「小賢しいマネを…、だが…！」

ナイトはヒート・サーベルを振り上げると、先程仕留め損なったデザートザク目掛け放り投げた。すると、ヒート・サーベルはブレる事なくデザートザクの頭部に突き刺さった。

さっきも述べたが、彼女はナイフ投げの部類は得意なのだ。更に今度は右腕の袖口からヒートワイヤーを伸ばすと、投げつけたヒート・サーベルの柄に巻き付け、「まだまだ…！」と掛け声を発し、まるで鞭のようにヒート・サーベルを振り回し始めた。そしてモビルスーツの動きとは思えない程の軽快なステップで、自機を取り囲

む敵機をすべて撃破した。

「他愛もない…。」

呟くと共にヒート・サーベルを手中に収める。

戦闘が始まってからかなり多く倒して来たおかげで、そこそこ数も少なくなってきた。規模が大きいと聞いていたが、所詮はこの程度かと消沈しながら長い髪をかき分ける。

それよりも、さっきまで一緒だったアヤ・メイソンが何処かへ消えた事が気になる。まさか湖の近くには行ってないと良いが。いくらガンダムとはいえ、水中戦にはそれ程対応してないだろうし、ましてや乗っているのは新人だ。

そういえば出撃前、ライト・グレイディに「出来るだけ目を離すな。」と言われていたが、戦闘による気持ちの高揚に身を任せていたおかげで、しっかり見失ってしまった事に若干の罪悪感を感じた。”マズいかも知れない”と胸中で呟く彼女は、もう一度周りを見渡した。

「そういえば、ここどこ…？」

時刻が深夜だけに周りが真っ暗なので詳しくはわからないが、明らかに基地の姿が見えなくなっている。暫く考えていると、フェアリー・ハロウェイの駆る”ＭＳ－１４Ａ　ゲルググ”が血相を変えて飛んで来た。実際に血相を変えているのはゲルググではなく、モニターに映るフェアリーの顔なのだが、そんな事はお分かりであろう。

『隊長！基地から離れ過ぎですよ！』

「…？」

『基地の外へ誘導されたんです！早く戻りましょう！メイソン少尉が心配です！』

「あ…」

ナイトの返事より先に、フェアリーは急いで機体をジャンプさせ基地へ向かっていった。ナイトもその後を追う用に機体をジャンプさせ基地へと向かう。なる程、基地から外れたから敵機が少なかったのかと、彼女は人知れず納得していた。それと同時に、言葉では言い表せない感情が込み上げて来た。何か取り返しの利かない、大切なモノを壊してしまったような、そんな感情だ。

基地が近くまで迫って来た時、無線機から『あはははは！』という女の不気味な笑い声がコクピット内に響き渡り体を震わせた。

「何だ…！？」

そしてもう一度ジャンプをした時、自分の目を疑った。

何故なら十数機の残骸の真ん中で、ガンダムが佇んでいたからだ。その足元には、両脚を切断された《ＭＳ－０９　ドム》が倒れている。するとガンダムはビーム・サーベルから刀身を発信させると、狂ったように何度も何度もドムへ突き刺した。

周りにはまだ多数の機体が取り囲んでいるが、恐れをなしているのか浮き足立っている。

『メイソン少尉…ですか？』

「ハロウェイ…！ガンダムには近づくな…！」

『え？』

頭より先に動いた口が、そう叫んでいた。ナイトは無意識のうちに気付いていたのかも知れない。今のアヤは敵味方の判別がついていないどころか、今ここにいる理由すら忘れている可能性がある。とても危険な状態だという事を。

『あはははは！私は…私は！』

ドムが小爆発を起こし動かなくなったかと思うと、ガンダムは次の敵へと踊りかかった。

不運にも逃げ遅れたのはグフであった。そのグフは、右腕、頭部、左腕と順に切り刻まれて行き、最後にコクピットをスパイク・シールドで潰され、二度と動かなくなった。

「死にたくなければな…。」

ナイトはその様子を見ながら付け足した。一体アヤに何があったのかはわからないが、今日ほど自分の迂闊さを嘆いた事はない。一時的にとはいえ、自分の部下から目を離し、孤立させてしまった。

しかし、今は反省している時ではない。この状況を何とかしなければ。

「敵機をガンダムから逸らせ…！できるだけ戦わせるな…！」

『り、了解！』

返事を返したフェアリーは、ザク・マシンガンをガンダムの後ろにいた敵機へ撃ち放った。

すると、ガンダムが不機嫌そうにこちらに頭部を向ける。”私の獲物を奪うな”と言わんばかりに一瞥をくれると、また違う敵機へ

と踊りかかった。
彼女の目に映る今のガンダムの姿は、”白い悪魔”という異名ではない、まるで”悪魔”のように、そう神話などに登場する、本物の”悪魔”のように見えた。

FILE：15　迂闊（後書き）

次回も戦闘メインです。

ＦＩＬＥ：１６　壊れ行く彩（前書き）

今回は前回の数刻前の話しです。少々長くなってしまいましたが

…

ＦＩＬＥ：１６　壊れ行く彩

アヤ・メイソンは苦闘していた。
敵モビルスーツ隊は多数、いずれも一年戦争を生き抜いてきた熟練のパイロットが搭乗している。しかも身を隠せるような遮蔽物が無いこの状況は、１度しか実戦経験のないアヤにとって過酷な事この上なかった。
今も周りから敵機が迫りつつある。幸いまだ先発隊が合流してないとはいえ、敵との戦力差は気が遠のく程である。アヤの周りを取り囲む敵だけでも、ザッと５機はいるであろう。本当に何機のモビルスーツが基地にあるのであろうか。ナイト・サンダーランドがかなり倒したと思うのだが、一向に減っていない。逆に増えている気もする。ナイトと言えば、フェアリー・ハロウェイ共々さっきから姿が見えない。はぐれたのだろうか。
しかし、”あの時”よりはマシな方かもしれない。少なくとも機体は”ＦＡ－７９［ＦＰ］　フルアーマーガンダム・ストライカー”と高性能で、訓練もそれなり積んできた。何より１人じゃ無いというだけで、驚く程に落ち着いていられる。

「当たれ！」

自機を包囲するモビルスーツ隊を苦辛しながらも倒すと、残り１機となった”ＭＳ－０６Ｊ　陸戦型ザク？”をロックオンサイトに捉え、アヤは力一杯トリガーを引く。それに連動し、右肩に装備されたビームキャノンから伸びた極太のメガ粒子は、回避行動をとった陸戦型ザクの右腕もろとも脇腹をを貫いた。

「落ち着けアヤ…。隊長が見たら、また力み過ぎって怒られちゃうな…。」

そう言って自分の手に目をやる。ニューヤーク基地での訓練で、ライト・グレイディによく注意された事だ。引き金を引くときに、無駄な力が加わり過ぎているらしい。
そんな事を考えていると、幾つものの砲弾が機体を震わせた。

「左！…後ろからも！？」

取り囲むように左から《ＭＳ－０６Ｋ　ザクキャノン》が２機と、真後ろから《ＭＳ－０６Ｖ　ザクタンク》と《ＭＳ－０９Ｋ－１　ドム・キャノン単砲仕様》が、それぞれ肩に備え付けた巨砲から実体弾を浴びせて来る。《ガンダリウム合金》という贅沢なフルアーマー装備が施されているおかげで、多少の攻撃では何ともないのたが、流石にキャノン砲の十字放火は厳しい。
アヤはビーム・ライフルを構え、左に位置するザクキャノンを牽制すると、ニューヤーク基地でバックパックの左側に追加装備された《中距離ガトリング砲》を左手に構える。一年戦争時、《第１６独立戦隊》に配備されていた《ＲＸ－７８－５　ガンダム５号機》の《ジャイアント・ガトリング》と見た目はそっくりだが、こっちは片手で扱えるよう、若干小型化し反動も低く抑えられている。弾薬は腰部裏側にぶら下げるように装備してあり、１５０発分あるドラム缶型の弾倉が２つある。

「力むなよ…。」

そう呟くとバーニアを炊き素早い動きで包囲網を脱する。フルアーマー装備でかなり重量が増えたものの、大型バックパックのおかげでジム以上の素早さは確保してある。
包囲網を脱したアヤはザクタンクとドム・キャノンの後ろへまわり、今度は必要な分の力を込めてトリガーを引く。ガトリングの銃

身が回転すると2機目掛けまばらな実体弾が飛んで行き、ホバー移動するドム・キャノンはギリギリ逃したものの、小回りの利かないザクタンクの装甲を蜂の巣にした。

「そんなの想定内だ…。」

”自分の腕前は自分がよく知っている”と言わんばかりに呟くと、逃したドム・キャノンは無視してザクキャノン2機へビーム・ライフルとガトリングの銃口を向けた。その時。

「うわぁぁぁ!?な、何!?」

突然、背後から幾つもの触手が機体に巻き付いたかと思うと電流が駆け巡り、後ろへ引っ張られ始めた。

焦ったアヤはフットペダルを奥まで踏み込み、フル出力で無理やりその触手から逃れた。

「ハァハァ…、み、湖からなの…!?」

落ち着いていたと思っていたが、いつの間にか自分が湖の近くにいた事すら気付いてなかった。出撃前、”湖には近付くな”と言われていたが、そんな事より幾つもの触手が湖から伸びている事に驚いた。その光景に「何…なの?」とビクつく声を漏らした。

湖を凝視しているといきなり触手が水中へ引っ込み、代わりにミサイルが何発も飛び出て来た。

「ミサイル!?モビルスーツか!」

「撃ち落としてやる!」と叫びガトリングを構える。ジグザグに動きつつ飛来するミサイル群をガトリングで撃ち落としていると、

今度は後ろから肩や足下に衝撃が走った。ザクキャノンとドム・キャノンがいた事を忘れていたのだ。

「マズい！…でも、まだまだ！」

目の前にあるコンソールで後方の3機に照準を合わせると、「喰らえ！」という叫びと共に操縦桿にあるボタンを押す。すると背部の誘導ミサイルが4発飛び出て、敵機へ向かう。

ミノフスキー粒子下では追尾性能は格段に落ちるものの、このミサイルはそれをカバーすべく上空で弾頭から散弾のように幾つもの小型ミサイルがばらまかれる仕組みになっている。

一瞬のうちに4発のミサイルが何倍にも増え、まるでシャワーのように敵機へ降り注いだ。しかし、ザクキャノン1機を覗き易々と避けられ、「ダメなの！？」と叫んでいるうちに湖からミサイルが上がり、更に新たな陸戦型ザクが3機合流して来た。

「囲まれた…！？きゃっ！」

ザクキャノンの砲撃に陸戦型ザクのマシンガン、更には湖からのミサイル。いくらフルアーマー装備を施してあるとはいえ、これだけの集中放火は厳しい。体が前後左右に激しく揺さぶられ、体を固定する為のシートベルトが体に食い込む痛みがノーマルスーツ越しにもわかる。

「ぐぁっ！こんな…うわっ！」

コンソールに頭をぶつけた事でバイザーが欠け、破片が額に突き刺さった。普通ならヘアバックが作動するはずなのだが、どういうわけか作動しなかった。恐らく整備不良ではなく、何らかの衝撃により不備を起こしたのだろう。

「距離を…とらないと…！逃げなきゃ…！きゃぁっ！」

しかし、逃げようにも囲まれて逃げ道は無くなり、まさに絶体絶命の状況に陥った。アヤは”あの時と同じだ”と胸中で呟くと共に、操縦桿を握る手から力が抜けるのがわかった。

その時、機体の両脚に湖から伸びる触手が絡みつき、引っ張られると共に仰向けに倒れ込んだ。てっきりこのまま湖の中へ引きずり込まれるかと思ったが、そうではなく湖の近くまで引きずられると、《ＭＳＭ－０４Ｎ　アッグガイ》が現れ機体に跨るようにのしかかってきた。

『ガンダムったって、所詮はこの程度か！アムロ・レイには遠く及ばぬな！腐った連邦のクズパイロットが！』

接触回線からアッグガイのパイロットの濁声がコクピット内に響き渡った。

”クズパイロット”

それはアヤが左遷される際に、上官や同僚から言われた言葉と同じだった。

『その程度で我等に挑むなど！１人悲しく死んで行くがいい！』

その瞬間、アッグガイの左腕がゆっくり持ち上がりコクピットへ向けられたが、それが振り下ろされる事はなかった。何故なら、ビーム・サーベルの刀身が肩の連結部から溶断したからだ。

「クズだと…？」

アヤは呟くと共に、ビーム・サーベルをゆっくり左へ動かして行

き、ジワジワと敵機へ食い込ませる。接触回線から『うわっ！うわぁぁ！』という声が聞こえてくるが、”そんな事知ったこっちゃ無い”と言わんばかりに、ジワジワ食い込ませる

「なら、クズに殺されるあんたは何なの…？ねぇ…、教えてよ！」

『こ、こいつめ！うわぁぁ！』

アッグガイは残った右腕を振り上げようとしたが、その前にコクピットに刀身がとどき、パイロットを焼き殺した。

「素敵な断末魔をありがとう！あはははは！」

アヤは動かなくなったアッグガイから這い出ると、片足で踏みつけながら高々と笑い声を上げた。

その瞬間、彼女は今ここにいる理由が全くわからなくなった。

ＦＩＬＥ：１６　壊れ行く彩（後書き）

次回はエイブルチームの様子を書きます。

ＦＩＬＥ：１７　侵入者（前書き）

今回はあまり上手く書けなかったので、期待せずに読んで下さい。

FILE：17　侵入者

「悪魔が覚醒した…か。」

テック・D・マクガニルは、アタッシュケースを脇に起きながら、悲しげに呟いた。

「え？」

隣で座っている黒髪でポニーテールの女性が疑問を浮かべた。およそオシャレには全く興味のないであろうその女性は、銃の手入れキットを持ち仕切りに拳銃の手入れをしていた。

「少し厄介なタイプだな。」

「あの…、大尉？」

「そうは思わないかい？エリー？」

《エリー》と呼ばれた女性は、テックの問いに目に見えて困っていた。彼女は特殊部隊の隊長を務めており、テックの腹心の部下である。

「わ、私…、オカルトなんて信じませんから…」

「フッ…、そうだったな。」

テックは残念そうな返事を返しながら、エリーが手入れしていた拳銃を取り上げた。確か旧世紀に造られたモノの復刻版で、《ルガ

ー》とかいう種類だ。

「君が一番信じてるのは、コレだったな？」

「あ、はい。銃は嘘つきませんから…。」

エリーは照れくさそうに答え、更にモジモジしながら「その銃は、少し特殊で…」と続ける。

「ちゃんと手入れしてやらないと、直ぐ不調を起こしてしまうんです。」

「…詳しいんだな。」

銃についてあまり精通してないテックは、少し戸惑いつつ答えた。

「スミマセン…」

「いや、謝る事じゃない。そうだな…、俺のもやって貰おうかな？銃の手入れはどうも苦手でね。」

するとテックは、懐から一丁の自動拳銃を取り出した。大戦時に正規軍で支給された自動拳銃だ。

「私で良ければ…」

「ん、じゃあ頼むよ。」

エリーはテックから銃を受け取るや否や、早速手入れにかかった。

「これ…、最後に手入れしたのいつですか？」

「さぁ？覚えてないな。」

「ゴミが詰まって、コレじゃ撃てませんよ？」

余程酷かったのか、少し呆れ顔で答えた。実際、もう何週間も撃っていないし手入れすらしていない。曲刀の手入れならしょっちゅうやっているのだが。

「ちゃんと手入れしないと、いざという時に使えなかったら…はい。出来ましたよ。」

「…早いな。」

「慣れてますから。」

何とエリーは話しているうちにちゃっちゃと手入れを済ませてしまった。

銃を受け取ったテックが「君は…」と何か言いかけた瞬間、耳を覆いたくなるような爆発音が室内に響き渡った。

「何だ！？」

状況を把握するより早く、「逃げて下さい！」という叫び声と共に1人の作業服を着込み作業帽を深くかぶった、恐らく整備士の男性が転がるように駆け込んで来た。

「エンジンが爆発しました！早く逃げないと誘爆で死んでしまいます！」

整備士は早口にそう言い終わるより早く、アタッシュケースを持ちテックの腕を掴むと戸口へ向かわせる。

「大尉！逃げないのですか！？」

しかし、テックは整備士の腕を振り払うと睨み付けたまま、体を動かそうとしない。実際は睨み付けてるだけではなく、相手の特徴を観察しているのだ。

「どうやって入った？」

「へ？」

すると、腰にぶら下げた曲刀を引き抜き整備士の体を下から上へと切り裂いた…かに思えた。

「うわっ！何すんだ！」

「大尉！？」

ギリギリの所で整備士が後ろに倒れ、帽子が宙を舞うのみに終わった。それと同時に、アタッシュケースも床に転がった。

「殺したつもりだったが、よく避けたな？」

「あぁ！？遊んでる暇はないだろ！」

整備士は体を立たせるや否やテックに怒鳴りつけるが、「黙れ。」の一言に言葉を噤んだ。

「正体は分かっている、仲間は何人だ？」

「何を…！？」

「しかし、ここまで誰にもバレずに忍び込むとは、スパイと言ったところか？」

テックは曲刀を整備士の鼻先に突き付け、まるで尋問するかのように問い詰める。そう、彼には一目見た時からわかっていたのだ。

「俺には分かる。悪魔め…。」

その瞬間、整備士は「冗談キツいぜ！？」と上擦った声を出した。

「大した演技力だが、彼女を騙せても俺は騙せないぞ？」

言葉を言い終えると同時に、複数の武装した兵士が駆け込んで来た。彼らは、エリー率いる特殊部隊のメンバーだ。

「隊長、ネズミが入り込んでるって、コイツですかい？」

「…のようだ。」

エリーが答えるや否や、全員が自動小銃を整備士へ向ける。それと同時に「下がって下さい。」と言われたテックは、曲刀を鞘に収め後ろへ下がった。

しかし、その判断を直ぐに後悔する事になるとは、思いもしなかった。

「拘束しろ！」

「イエッサー。後ろを向き、手を壁につけろ。」

流石に銃を向けられ抵抗する意思が薄れたのか、整備士は大人しく従い手を壁につけた。

それを確認し1人の兵士がボディチェックを使用とした瞬間、何かが兵士の足元に転がった。

「ん？ぐあっ！？」

それに気を取られ目線が逸れた瞬間、整備士の肘が兵士の腹部へ入り、怯んだ隙をついて腕を固めると、ポケットからナイフを取り出しそれを兵士の喉へ突き付けた。

「貴様！」

「はい、動かないね。この状況じゃ、当たるのは俺じゃなくこのオッサンだよ？」

その場にいた全員がトリガーへ力を込めかけたが、整備士の言葉でそれを中断した。その隙に、整備士はアタッシュケースを蹴りながらゆっくり戸口へと向かう。確かに整備士の体は兵士の体により殆ど隠れており、狙いようによっては当たるだろうが、ほぼ不可能であろう。

「じゃ、コレは貰って行くよ？サイナラ！」

「ぐぁぁぁ！」

そして戸口の前まで行くとアタッシュケースを拾い上げ、ナイフを兵士の足に突き刺すと同時に自動ドアを閉めて逃げて行った。

「クソ、追え！」

兵士の中の1人がそう叫び、兵士達が戸口へ向かうが、故障したのか自動ドアが全く開かない。恐らく、整備士が外から細工をしたのであろう。

「良い腕してるな、アイツ。」

「えぇ、連邦にしては…」

「いや、連邦では無いな。」

テックの言葉にエリーは一瞬疑問を浮かべ「では奴は？」と尋ねるが、テックは答えず代わりに意味不明な笑みを浮かべた。

「何にせよ、アイツも悪魔さ。俺に気配を悟らせないとは、大した悪魔だ。」

すると徐に戸口まで向かい、自動ドアのスイッチを一殴りする。すると、奇妙な音を立てて少しドアが開いた。

ＦＩＬＥ：１８　潜入、エイブルチーム（前書き）

今回は基地の内装を簡単に紹介しますが、いずれもオリジナルです。

FILE：18　潜入、エイブルチーム

ライト・グレイディは、不安で胸が一杯だった。

最初は不安などなかったのだが、つい先程何かが弾けたような感覚を覚えたかと思えば、それ以来胸騒ぎがしてならない。この胸騒ぎの原因は曖昧だが、外から来ている事ははっきりわかる。早く切り上げて外のチームと合流しなければ、取り返しのつかない事になる気がする。ライトの中で、そんな事ばかりが木霊していた。

しかし、今は眼前の事に集中しなければならない。この作戦の要は、彼らエイブルチームにかかっていると言っても、過言ではないのだから。

さて、戦闘が始まって数分が経つと、戦闘による混乱に乗じシュート・シェパードと共に基地の適当な入り口から忍び込み、先ずは格納庫へと向かった。シュートなのだが、彼は結局ライトと共に動く事にしたようで、照れくさそうに「オッサン1人は危険だ…。」と言った事は、他言無用である。

それはさておき、ライトはジオン公国の大尉用の軍服に、シュートは作業服に着替え、勘を頼りに基地の中を動き回った。流石に戦闘中だけあって、誰も2人を疑う余裕はないようで、大概は素通りしてくれる。しばらく基地の中を動き回ると、ようやく格納庫まで辿り着いた。基地の格納庫を見つけた時の2人の驚いきは、大袈裟かも知れないが、計り知れないモノであった。何故なら、格納庫のみならず基地の主要施設は、全て人工的に造られた地下施設に設立されていたからだ。一体どうやって造ったのかは、格納庫に配備してあるモビルスーツなどで容易に想像がつく。恐らく全て造られたのは、恐らく大戦後期からであろう。しかし、大戦時に造られた割には、大した設備である。地上と繋がる搬入用エレベーターデッキと、もう1つ二重開閉式のデッキがある。恐らく湖に繋がっているのであろうその搬入口は、水陸両用モビルスーツの出撃口にもなっ

ており、ついさっきも《ＭＳＭ－０８　ゾゴッグ》など数機が出撃していった。
　さて、いつまでも関心している場合ではない２人は、作業をするフリをしてバレないようザッと格納庫内を見渡した。すると、１機の黒く塗装された《コムサイ》に目が止まった。そのコムサイは、明らかに発進準備をしていた。黒く塗装されているのは、恐らく闇夜に紛れる為であろう。

「奴ら既に事を始め掛けてんな…。早くしないと、転がり始めた石ころは行くとこまで行っちまうぜ？」

　作業服を着慣れていないのか仕切りに首もとをいじっているシュートが、柄にもなく詩人じみた言葉をライトに掛けた。しかし、彼の言うことは間違ってはいない。事は一二を争う状況だ。

「なら、その石ころを蹴飛ばしてやればいい。コムサイを鉄クズにするぞ。」

　そう言うライトの手には、工作員が使用する爆薬がワンセットあった。これはあらかじめ用意していたモノではなく、ジオン側から拝借したものだ。

「へっ、力押しかい。」

「不服か？」

「いや、好きだぜ。そんじゃ、コムサイは俺に任せて、オッサンは逃げ道を作っててくれ。」

「オッサン言うな。任せた。」

「任せろ。」

するとシュートは、爆薬を掴み取り役割を果たすためにコムサイへと向かった。

一方のライトは、近くを通りかかった兵士に話し掛ける。その兵士は格好からして、歩兵のようだ。

「君、あのコムサイは大丈夫か？」

「はっ！整備は万全であります！予定通り〇三〇〇時には出撃出来ます！」

兵士は聞いてもいないのに、出撃時刻を語ってくれた。やはり大尉だけはある。

その話しが本当だとすると、後1時間で出撃だ。

「戦闘中でも出るのか？」

「はい！地上の戦力は統率力が無く、容易に抑えられるそうです！」

「統率力が無い？」

その瞬間、この不安の正体がわかった気がした。

「成功すると思うか？」

「心配いりません！テック・D・マクガニル大尉が全ての悪魔を払ってくれます！」

「テック・D・マクガニル？」

その時、凄まじい爆発音がライトの耳朶を打った。見ると、コムサイの後部エンジンから炎が上がっている。

（早過ぎやしないか…？）

「な、何で！？整備は完璧のはず…！？」

「落ち着け、君は消火器を持ってくるんだ。いいな。」

「は…はっ！」

動揺する兵士を遠ざけたライトは、どうするべきか周りを見渡した。

当初はモビルスーツを奪取し、湖から逃げる予定だったが、どうやら無駄話が過ぎたようで、もうそんな時間がない。

しばらくキョロキョロ周りを見ていると、「逃がすな！」という声に嫌な予感が過ぎった。恐る恐るコムサイの方を見てみると、アタッシュケースを持ったシュートが慌ただしく出て来た。後ろからは、自動小銃を構えた兵士と、何故か曲刀を腰にぶら下げている兵士が現れた。

「バカかあいつ？」

余計な問題が増えた事に頭を抱えつつ、ライトはまた思考を駆け巡らせた。

ＦＩＬＥ：１８　潜入、エイブルチーム（後書き）

次回からは撤退戦になります。

ＦＩＬＥ：１９　救出（前書き）

勢いで書いた割には、まだマシな方だと自負してます（＾Ｏ＾）

FILE：19　救出

ライト・グレイディは必死だった。
まさか、シュート・シェパードの正体がバレてしまうとは全く予想していなかった。しかし、幸いにもまだライトの正体はバレていない。つまり、まだ自由に動けるという事だ。
銃撃を防ぐべく適当な遮蔽物に身を隠したシュートを目の端に収め、ライトは武器を調達すべく一度格納庫を出た。とはいえ、どこに何があるのかよくわからないこの状況で、どれだけの武器がかき集められるかはわからない。しかも相手の戦力は、パイロット、整備士、ましてやコックも合わせた基地全体の人間だ。ただ武器をかき集めるだけではなく、使えそうな物とそうでない物を見極めながら集めなければならない。
さて、あちこち駆けずり回ったおかげで、それなり使えそうな武器は揃った。後は、これをどう使い分けるかだ。

「ほう…、あれは使えそうだな…。」

すると、ライトはある部屋の前で立ち止まった。
一方のシュートは、敵部隊の銃撃から逃れられず、最初の遮蔽物から動けてなかった。手持ちの武器といえば、コンバットナイフ1本と、自動拳銃1丁だけである

「ったく、エラい事になったもんだ…。オッサンに顔向けできねぇな…。」

そう呟きながら、自動拳銃のマガジンを入れ替える。一時しのぎとはいえ、抵抗しているおかげでこの状況より悪くはならないでいられる。それにアタッシュケースがある事で、敵も迂闊には手を出

せないのであろう。

「チッ！ラスワンかよっ！」

流石に弾薬が尽きはじめ、ついに最後のマガジンになった。シュートは覚悟を決めるべくスライドに手をかけ、力一杯引く。その瞬間、どこかで爆発が起こったのか、凄まじい爆発音が基地内を駆け巡った。それと同時に、あらゆる電力が低下し照明が落ちた。

「何だ！？」

真っ暗闇に包まれたシュートの足元に、何かが滑り込んで来た。それを手に持ってみると、夜襲などによく用いられる暗視ゴーグルであった。

「やってくれるぜ…、オッサン！」

暗視ゴーグルを装備したシュートは、アタッシュケースをひっつかみ敵に牽制しながら駆け出した。

向かう場所は、格納庫を出る戸口である。何故そこに向かうかと聞かれれば、勘としか言いようがない。

「逃がすな！撃て！」

「待て！予備電源が作動するまで撃つな！同士討ちになるぞ！」

そんな叫びを耳にはさみながら、シュートは真っ直ぐ戸口へ向かった。すると、全く違う位置からライフルの銃声が響いた。

「うぐっ！あ、足をやられた！」

「あぁぁ！俺も足を！」

命中したのか、敵の呻き声が聞こえた。足を狙ったのか、それとも狙いがそれたのかはわからないが、この暗闇で狙撃するとはなかなかだ。

そんなうちに、シュートは戸口へと辿り着き更に奥へ行き角を曲がった。

「はぁはぁ、やるじゃねぇか…、オッサン…。」

「オッサン言うな。」

息を整えているところに、ライトが遅れて現れた。

それと同時に予備電源が作動したのか、照明が一斉に復旧した。

「このまま来た道を戻り、一気に脱出するぞ。」

そう言いつつ、ライトはシュートにショットガンを渡した。

「何でショットガン何だよ！？普通、ＡＫライフルとかサブマシンガンとかあるだろ！？」

「贅沢言うな、武器があるだけマシと思え。」

そういうライトの目には、怒気が見え隠れしており、最後に述べた「この愚か者が」という言葉には、嫌みがタップリであった。

「自分の腕を過信して功を焦るとは何事だ。その上敵に正体がバレ、身動きがとれなくなるなど…。」

「あぁもう！わかりましたから！」

「反省しろ。行くぞ。」

「へいへい、お供しますよ。」

そして2人は、地上へ上がる為のエレベーターまで走った。

ＦＩＬＥ：２０　震えた声

罠にかかった事にいち早く気付き、慌てて基地に帰投したにも関わらず、かなり時間がかかった事にマイケルはイラつき、何かしらの責任を感じていた。そして、基地についた時の光景に、体中の気を粟立たせた。

何故なら、基地のモビルスーツ隊が見るも無惨なガラクタへと変わり果てていたからだ。

「酷いな…。」

『小隊長！ガンダムですぜ！あれっ！』

”ＭＳ－０６Ｊ　陸戦型ザク？”のパイロットの１人が叫んだ先には、マゼンタのフルアーマーを装備したガンダムが、１機で多数のモビルスーツを相手にしていた。いずれも浮き足立っており、たった１機のガンダムにやられている。

「これを…、ガンダム１機でやったのか…？」

『小隊長！あっちにはゲルググが２機います！』

そこから少し離れた場所で、こっちは見事な連携でモビルスーツ隊を翻弄している２機のゲルググがいた。

「あっちは１小隊ってとこだな。」

『どうしますか！？』

興奮した声を発する部下を尻目に、マイケルは優先順位を考えた。簡単な2択である。フルアーマーガンダムを先に叩くか、ゲルググ1小隊を先に潰すか。

「よし、我々はガンダムを叩く。」

『ガンダムをですか？』

「ガンダムの方が厄介そうだ。あっちは第1、第3小隊に任せればいい。行くぞ。」

『『イエッサー！』』

部下の返答とほぼ同時に、マイケルはフットペダルを踏み込み、”ＭＳ－０８Ｔ／Ｄ　イフリート・ダガー”をホバー移動させる。

「火器でガンダムを包囲、俺より前には出るな。」

『『イエッサー！』』

後方の2機が別れた瞬間、イフリート・ダガーの左腰に装備された日本刀型実体剣（コールドソード）を引き抜き、後ろからフルアーマーガンダムに切りかかった。

すると、ガンダムはまるで背中に目があるかのように、前を向いたままビーム・サーベルでコールドソードを受け止めた。

「一筋縄では行かないか…。」

呟いたマイケルは一旦機体を後退させ、距離を取った。

それと同時に、陸戦型ザクのザク・マシンガンの砲弾がフルアー

マーガンダムを襲った。

『何て重装甲なんだ！？』

しかし、その装甲を貫くまでにはいかなかった。するとガンダムのバックパックからミサイルが上がり、こちらに向かって来た。

「弾幕を張りつつ散開。あの程度でやられるなよ。」

『『イエッサー！』』

陸戦型ザクはザク・マシンガンで弾幕を張りつつ左右に広がり、マイケルは機体を突進させる。

「これはどうかな？」

機体を突進させつつ、今度は両太股に装備されたダガー型武器（コールドダガー）を抜き取り、フルアーマーガンダムに投げつける。

コールドダガーは上手く当てることができれば、ヒートロッドと同じく敵機の電気系統に障害を発生させる事ができる。

しかし、今回はそうはいかず、ビーム・サーベルで弾かれてしまった。そしてそのまま、スラスターを噴かし突進して来る。

「くっ…。」

フルアーマーガンダムの突進は、イフリート・ダガーに比べて格段に素早く、すぐさま眼前に迫って来た。

しかしマイケルは焦る事なく、冷静にコールドソードを一振りする。すると、丁度フルアーマーガンダムもビーム・サーベルを振り下ろし、お互いの刀身がぶつかり合った。

「タイミングは合わせられる…。機体の性能は良くても、パイロットはイマイチのようだな。」

そう呟いた瞬間、回線から『うるさい…！』と女性のくぐもった声が聞こえてきた。どうやら接触回線が開いたようで、さっきの呟きが筒抜けだったようだ。

『殺してやる！殺してやる！殺してやる！』

すると、怒涛の如くビーム・サーベルが何度も振り下ろされ始めた。一見めちゃくちゃのように見えるが、しかし隙がない動きをしている。

『死ね！死んじゃえ！』

「くっ…、泣いている…？」

そう、回線から響くその声は、確かに涙に震えていた。
普段マイケルはそんな事ないのだが、今回ばかりは敵パイロットのわけも知らぬ悲しみに、同情してしまった。

ＦＩＬＥ：２１　エクソシスト（前書き）

今回はライトの前に強敵が現れます。

そして、ライトの少し変わった趣向が…

FILE：21　エクソシスト

ライト・グレイディは、生身の人間を撃つのは嫌いだ。
何故なら、モビルスーツなら腕を撃とうが足を撃とうが、コクピットやメインエンジンなどを撃ち抜かない限りほぼ無傷で行動不能にできるが、生身の人間はそうではない。どこを撃ち抜くにしろ、動脈やらに気をつけなければ、簡単に死に至らしめてしまう。それはライトとしては、何としても避けたいものだ。
とはいえ、追ってきているからには反撃しなければならない。さもないと、フルオートライフルの銃弾にさらされ、一瞬後には蜂の巣だ。
さて、地上基地に上がった後は、大した妨害も無いままアッサリ外まで出れた。しかし、外に出たからと言って安心はしてはならない。基地からモビルスーツまではかなり距離があり、そこにたどり着けるかが問題だ。もしかしたら、追撃を受けたり、敵とバッタリ鉢合わせになる可能性もある。
果たして悪い予感は当たり、敵と鉢合わせこそはしなかったものの、外に出た瞬間から、どこからか敵部隊が現れた。

「おっと！団体さんのお出ましだ！」

「言ってる場合か。森の中に逃げ込むぞ。」

「ヘイヘイ。」

森の中に逃げ込んだライトは、シュート・シェパードと共に手頃な場所に身を隠し、敵の数を数える。

「敵の数は１２、案外少なめだな。」

「どうする？確実に殺していかにゃ、逃げ切れないぜ？」

「殺す必要はない。君のおかげで敵はこっちを甘く見ている。それを利用して戦力を分散して行けばいい。」

「どうもお褒めにあずかり光栄でありますよ…！」

シュートは嫌みタップリのライトの言葉に、これまた嫌みタップリの言葉を返したが、その瞬間、ライフルの弾丸が掠めた。

「マズい、もうバレた！」

「君は先に行け。」

「は？」

「先に行ってモビルスーツを起動させろ。そいつを持ったままじゃ、邪魔になるだけだ。」

ライトは片膝をつくと、ライフルを構える。そして狙いを定め、トリガーを引いた。

「これで2人足止めした。怪我した仲間をみると、助けたくなるだろ？それにあっちは油断している。戦力を裂くのに、躊躇いはないだろう。」

みると1人の兵士が肩を押さえ、無傷の兵士がその兵士に寄り添っている。

なるなど、敵を足止めする為にわざと殺さず、怪我をさせている

のか。と、シュートは思ったが、ライトとしてはどっちつかずであった。

「早く行け。モビルスーツを起動させた後は、こっちに戻ってこい。1機でも歩兵には脅威になることは、君達がよく知ってるだろ？」

「チッ！わかったよ！」

シュートは不服そうに舌打ちをすると、「先に死ぬなよ！」と言い残し走っていった。

「部下を見捨てて死ねるか…。」

呟くと共に、ライトは全く別の場所へ走り出した。

追跡を自分の方へ向かせるには、何か目印を残せばいい。しかし、そんなに大きな目印はいらない。例えば、地面に足跡を分かり易く残したり、雑草を踏んだり、木の枝を折ったりだ。極めつけは銃声だ。

これで敵部隊はこちらに来るだろう。

「よし、こっちに来てはいるな…。後は罠にさえかかってくれれば…。」

一応、移動しながらも簡単な罠は張ったとはいえ、向こうもバカではないだろうから、こちらの思惑通り行くとは限らない。こんな時は、ただ上手く行くことを祈るのみだ。

しかし、そんなライトの祈りも見事に裏切られ、敵部隊は不意に足を止め進行を止めた。

「罠があると気付かれたか？」

そんな時、ライトの後方から真っ直ぐ駆け抜けてくる足音が聞こえてきた。驚いて振り返ったライトの目に映ったものは、銀色のカーブを描く曲刀であった。

「くっ…ぐわっ！？」

慌てて伏せたライトの頭上を斬撃が掠めたかと思えば、続けざまに蹴りが腹部へ入り、派手に吹っ飛んだ。蹴り飛ばされた彼は、しかし痛む腹部を抑えながら、なんとか怯む事なく体制を整え腰から自動拳銃を抜き取った。

「ゲホッゲホッ！…何だ！？」

蹴り飛ばされた拍子に、ライフルはおろか暗視ゴーグルまで落としてしまい、夜の暗闇に慣れない目を必死に凝らした。

「よく避けたな、悪魔め…。」

まだ視認できぬ敵が出し抜けに発したその言葉に、ライトは意味もわからぬ恐怖を感じた。

「悪魔？なんの事だ？」

「さっきの悪魔といい、俺もまだまだ修行不足だな…。」

そう言いながら、その敵は曲刀を撫でる。厳密には、曲刀を撫でる金属音が聞こえた。

「質問に答えろ、悪魔とは何だ？」

「お前にもわかっている筈だ。」

「？」

「俺の名は、テック・Ｄ・マクガニル。悪魔を払う者、エクソシストだ。行くぞ！」

叫ぶと共に、テック・Ｄ・マクガニルと名乗った人物は、凄まじいスピードで接近し一文字に闇夜を切り裂いた。

「くそ！」

何とか避けたライトは、ほぼ無意識に自動拳銃のトリガーを引いた。まだ目が暗闇に慣れていないとはいえ、流石に近距離ならどこにいるかわかる。足を狙えば後は楽だ。

確実に当たると確信したその瞬間、何とテックは飛び上がり弾丸をかわすと、回し蹴りを披露した。

「何て奴だ！？ぐあっ！」

驚愕しながらもギリギリのところでかわしたものの、続けざまに繰り出された拳がモロに顔面に入った。それでもなんとか体制を保ち、牽制しつつ距離をとる。

「やはり、さっきといい今といい、確実に撃ち殺せるところを、お前はワザと急所を外しているな？ふざけているのか？」

「何がだ？」

「いや、それがお前の戦い方だと言うならば、それでいい。だが、お前の中の悪魔は、人間の命を奪いたがっているぞ？」

何を言っているのかはイマイチわからないが、殺す気で掛からなければこっちがやられる。しかし、それだけはどうしてもやりたくなかった。

そんな事を考えているうちに、目が暗闇に慣れてきたのかテックの姿がハッキリ見えてきた。

その姿は、思いのほか華奢な体を黒いジオン公国の制服で包み込み、右手に曲刀を構え、左腰に茶色い鞘をさしている。顔立ちはイマイチハッキリ見えぬが、彼はかなり目鼻立ちの整ったイケメンで、頭髪は若干長いショートヘアで、漆黒という表現がピッタリなほど真っ黒であった。　そんな分析をしていると、テックは「隙あり！」と叫び接近して来た。

「……」

それに対しライトは、自動拳銃の銃口をテックの頭部へ向け、無言でトリガーを引いた。

ＦＩＬＥ：２１　エクソシスト（後書き）

次回、ライトの過去が少し明るみに出ます。

ＦＩＬＥ：２２　過去のトラウマ（前書き）

今回は、ライトの過去が少しだけ明るみに出ます。最初に断っておきますが、そこそこ有りがちな内容です。

FILE：22　過去のトラウマ

ライト・グレイディは焦りを感じた。
こちらは自動拳銃という飛び道具を使っているにも関わらず、敵のテック・D・マクガニルにただの1発も当てるどころか、掠る事すらできていない。
地上の重力下にも関わらず、縦横無尽に駆け抜けるその姿は、昔何かで読んだ《忍者》とかいうのを彷彿させる。
それはさておき、ライトは未だにテックを殺す気で狙えてなかった。いや、頭では殺すつもりでトリガーを引いていても、体が勝手に狙いを逸らしてしまう。これでは勝てるものも勝てない。
そんな最中、不意にテックは攻撃の手をやめ、距離を離した。

「本気でやれ…といっても無駄だろう。」

「？」

「おそらくお前は、俺が動かなくても殺す事ができない。頭を狙っても、勝手に腕が動いてハズしてしまうだろう。」

テックの言うことは、まるっきり図星であった。実際、いくら急所をを狙おうと、銃弾は勝手に逸れてしまう。

「過去に酷い経験をしたろ？例えば、大切な人を殺してしまった…とか？」

その瞬間、ライトの眼前に黒い虚空が広がって行き、それと同時に拳銃を握る手から力が抜けて行くのを感じた。

「当たりのようだな。誰を殺した?友人、部下、両親、兄弟…、いや、恋人か?」

すんでのところで首を左右に激しく振り、「黙れ…!」とくぐもった声を発し拳銃を握り締めた。

「恋人でないなら…、妻だな?」

「黙れと…言ってるだろ!」

その瞬間、手元で弾けるような渇いた発砲音が鳴り響いた。どうやら怒りに任せ、無意識にトリガーを引いてしまったようだ。

「ぐっ!どうやら…、ビンゴのようだな。」

すると、テックは曲刀を手放し右肩を押さえた。みると、指の間から赤黒い血が滴るのが見えた。

「何があったか話せ。楽になる。」

「貴様に話す義理はない…。」

「義理はなくとも、話してみろ。」

どういうつもりか、テックは優しい笑みを浮かべている。まるで助けてやると言わんばかりに。

と、次の瞬間、沈黙を守っていた敵部隊から自動小銃の発砲音が鳴り始めた。どうやら、テックから曲刀が離れる事が銃撃再開の合図だったようだ。

「マズい、分が悪いな…。」

「待て！撃つな！まだ話は終わってない！」

テックは必死に叫ぶが、一向に銃撃はやむ気配がない。一方発砲音により冷静さを取り戻したライトは、手頃な木へ素早く身を隠し隙あらば発砲する。

ライフルと暗視ゴーグルがない今、暗闇を進行する部隊を狙うのは至難の業だが、何もしないよりはマシだ。

「距離はわからんが、使うしかないな…。」

そう呟くと共にライトは懐からリモコンを取り出し、ボタンを押した。

それと同時に、敵部隊の手前辺りで目を覆いたくなる程の眩い光と、凄まじい爆音が鳴り響いた。そう、仕掛けた罠とは、閃光弾である。ミノフスキー粒子が戦闘濃度まで達しているこの状況で、無線機器がどこまで有効かは不安だったが、距離、タイミング共にバッチリである。

これにより、敵部隊は視力と聴力がマヒしたはずだ。

「よし、逃げるか…。」

リモコンを投げ捨て走り去ろうとした瞬間、ライトの足元で銃弾が弾けた。

「よくも大尉を…！殺す！」

銃弾が来た方向をみると、いつの間に来たのかテックに寄り添いながら黒髪でポニーテールの女性が自動拳銃をこちらに向けている。

「やめろ。」

しかし、テックが自動拳銃を無理やり下ろさせた。

「しかし、大尉！」

「奴にはまだ話しがある。拘束しろ。」

と、その時。遠くの方からズシンズシンという音が聞こえてきた。

「何だ？」というテックの疑問をよそに、１機の《ＭＳ－０６Ｆ－２　後期量産型ザク？》が木々の間より現れた。

するとそのザクは、マニピュレーターをライトの前まで持って行き、ハッチを開ける。

「オッサン！早く乗れ！」

この状況でライトをオッサンと呼ぶ人物は、シュート・シェパードを置いて他ない。そう、ザクのパイロットはシュートであった。ライトは微笑を浮かべつつ「オッサン言うな。」と呟くと、軽い身のこなしでザクのマニピュレーターの上へ飛び乗った。

「目は潰した。暫くは追ってこないだろう。」

「よっしゃ！なら、捕まってろよ！」

ライトが乗ったのを確認したシュートは、急いでコクピットに座りハッチを閉める。そして機体を反転させ、来た道を戻り始めた。

その途中、ライトはザクのマニピュレーター越しにテックの方を見た。

（部外者が同情しやがって…。くそ…。）

ライトは自分の過去を見透かされた事に悔しさを感じ、きつく唇を噛み締めた。

ＦＩＬＥ：２２　過去のトラウマ（後書き）

シュートの機体”高機動型ザク後期型”は、記憶が正しければ宇宙専用機だったはずなので、宇宙はもちろん地上でも使えるザクはと考えていて、不意に思い当たった”後期量産型ザク？”に変更しました。

別にザクで無くとも良かったのですが、何となく個人的にシュートにはザクに乗って欲しかったので、ザクにしました。

この機体は、個人用にフットペダルの硬さなど若干カスタマイズは施されていますが、他と大差は無い量産機という設定です。

FILE：23　和らぐ心

アヤ・メイソンは泣いていた。

何が悲しくて泣いているのかはわからない。それでも、いつまで経っても涙が止まらない。これでは前がハッキリ見えないじゃないか。それに、額から滴る赤い液体も、ゆっくりながらも止まる気配がない。痛い、苦しい。そんな感情が、操縦桿を握る手に力を込めさせ、彼女を駆り立てていた。

ヒビの入ったバイザー越しに見える敵、歪んでいるとはいえイフリート・タイプのエース機。さっきから執拗に接近戦を挑んで来る鬱陶しい敵。何度斬りつけても、何発撃とうとかわされてしまう。

そのイフリートの影にいる敵モビルスーツも鬱陶しい。イフリートが一旦引く事に中距離からこそこそ狙い、地味な攻撃をしてくる。そっちを狙おうと目標を変えれば、イフリートがそうはさせまいと前を遮る。

「何で…、何で死なないの!?私の前から消えてよ!」

無意識に叫んでは、操縦桿を握る手に力を込め、ビーム・サーベルを振り下ろす。ずっとそんな事を繰り返し、無駄にエネルギーを消費している事に、アヤは気付いてなかった。

ただ敵に恐怖し、攻撃をし続ける。そうしなければ、死んでしまう。誰も助けてくれない。

『メイソン少尉!』

そんな時、1機のガンダム・タイプのモビルスーツがアヤの眼前に割り込んで来た。そのガンダムは右脚ふくらはぎ部の開閉部より、筒型のビーム・サーベルを引き抜くと、イフリートと切り結び始め

た。
一瞬の出来事であった。ガンダムはビーム・サーベルを巧みに操り、イフリートのコールドソードを弾き飛ばし、無防備になったイフリートを蹴り飛ばした。アヤがいくら斬りかかろうと、いくら撃とうとも倒せなかった敵を、そのガンダムは意図も容易く圧倒し、後退させたのだ。
イフリートを圧倒したガンダムは、すかさず彼女の方へ機体を流した。

「来ないで…こっち来ないで！」

それをどうしてか無意識に敵だと判断したアヤは、すかさずビーム・サーベルを振り下ろすが、その前に《ルナチタニウム性三重ハニカム構造シールド》がオールビューモニターの前面を埋め尽くした。

「きゃっ！」

そのまま体当たりされ、2機はもつれ合うように倒れ、地面に尻餅をついた。
すると今度は体当たりしてきたガンダムのコクピットが開き、ジオンの制服を着たパイロットが出て来た。そしてこちらに飛び移るや否や、コクピットハッチを操作仕出し、「何！？」と驚いているうちにハッチを開けパイロットが入り込んで来る。

「やめて！こないで！こないでよ！」

アヤはムチャクチャに手を動かし、パイロットを追い払おうとする。他者が見れば、それは酷く滑稽で、狂って見えたであろう。
しかし、パイロットは簡単にアヤの手を抑え込むと、「落ち着け

！」と一喝した。それにビクッと肩を震わし無意識に動きを止めると、今度はノーマルスーツのヘルメットを外された。

「落ち着くんだメイソン少尉。大丈夫…、大丈夫だから…。」

パイロットはそう呟くと、ポケットからハンカチを取り出し「可愛い顔が台無しだな…。」とアヤの顔をソッと拭う。汗や唾液、涙でまみれた顔を拭うのに何の躊躇いも見せないそのパイロットは、恐怖に駆られた彼女の心を自然に和らげて行った。すると不思議な事に、先程までとめどなく溢れ出ていた涙がピタリと流れなくなった。

「隊…長…？」

「スマナイ、怖い思いをさせてしまった。隊長失格だな。」

そう、そのパイロットはアヤの所属部隊の部隊長であり、彼女が片思いしているライト・グレイディであった。ライトはあの青い瞳をアヤに向け、優しい微笑を浮かべている。どうしたのか、顔に青あざを作っているのが気になったが。

「ケガしたのか？血が出てるぞ？」

「あ…。」

「みせてみろ。」

ライトはアヤの額に触れ、傷の具合を確かめると共に、どこからか携帯用応急セットを取り出し傷の手当てをしだした。

後でわかった事だが、額の傷は2針縫うほどの傷だったそうだ。

「これでよし。帰ったら、ちゃんと医者に診てもらうんだぞ。とりあえず、水分をとれ。」

そう言ってライトは水の入った水筒をコクピット脇から取り出し差し出した。アヤはゆっくりその水を口に含む。

余程喉が渇いていたのか、ゆっくり飲んだつもりが、気付けば水筒の水を飲み干す勢いで飲んでいた。

「はぁ～。」

「スッとしたか？」

「はい…。ところで隊長…、何でここに…？」

するとライトは一瞬悲しい顔をしたかと思うと、アヤの頬へ手を当て「助けに来た。」と呟いた。

「もう大丈夫だ。1人で無理する必要はない。いいね？」

「あ…。」

そして頭を優しく抱き締める。アヤは思わず顔を赤らめるが、今までにない心の安らぎに目を閉じた。

「あ、あの…、私…、酷い事を…！」

このままずっと抱き締めていて欲しいと思ったのも束の間、突然瞼の裏に自分のしていた行動が克明に映し出された。

手当たり次第に敵モビルスーツを襲い、バラバラにした後コクピ

ットを潰す。敵パイロットが恐怖におののく声や悲鳴を聞いては、狂ったように高らかな笑い声を上げ、また違う機体へと襲い掛かる。
普段のアヤなら絶対やらないどころか、そんな行動を嫌悪しているのだから、思い出した彼女の心境は辛いものであろう。

「泣くのはまだだ。」

ライトは涙目になるアヤの頬を両手で挟むと、「プロの軍人なら、反省や後悔より先に、この状況を切り抜ける事を考えろ。」と一喝する。

「帰ったら説教してやるから覚悟しろ。」

「説教…ですか…。程ほどにしてくれませんか…？」

ほっとしたような苦笑いを浮かべるアヤに、ライトは「容赦はせん」と微笑混じりに答え、頭を2度撫でるとハッチへと向かう。

「よく耐えた。後は任せろ。」

それだけ言い残すと、ライトは自機の”ＲＸ－７９［ＦＰ］　ガンダム・ストライカー”へ飛び移った。
アヤは思い出していた。ティターンズでの初陣、絶体絶命の状況にたった1機で助けに来てくれたガンダム。あの時みたいに、今回も来てくれた。こんな頼りないパイロットの為に、危険も省みずただ助けに来てくれた。
アヤは心の奥から湧き上がる、感謝という感情にまた涙目になりつつも、泣くまいと頭を激しく左右に振った。
その間にガンダムはゆっくり立ち上がると、無線回線からライトの声が聞こえてきた。

『目標の奪取に成功。全機、撤退する。無事帰還するまでが任務だ。気を引き締めて行くぞ。』

『ウイッス！』

『わかった…！』

『了解！』

その言葉に、全く気付かなかったが敵モビルスーツを抑えていた3機から順に声が上がった。アヤもコクピットハッチを閉めると、零れ落ちそうな涙を拭い「はい！」と精一杯の声を出した。

泣くのは後、後悔や反省も後、今やるべき事は、みんなで無事に帰る事。

アヤはそんな事を胸中で呟くと、冷静になった頭で操縦桿を操作し、迫り来る敵へと照準を合わせる。

ＦＩＬＥ：２４　撤退戦（前書き）

遅くなりました、スイマセン。
最近忙しくて、なかなか書けませんでした。
今回はタイトル通り、撤退戦を描きました。

ＦＩＬＥ：２４　撤退戦

アヤ・メイソンは安堵した。
交戦から撤退に転じた特別命令遊撃部隊と第０３ＭＳ小隊の合同部隊は、一番損傷の激しい”ＦＡ－７９［ＦＰ］　フルアーマーガンダム・ストライカー”と戦闘能力の低い”Ｍ３５３Ａ４　ブラッドハウンド”を中央に位置させスクエア隊形を組み後退していた。
殿になるように”ＲＸ－７９［ＦＰ］　ガンダム・ストライカー”と”ＭＳ－１４Ｂ　高機動型ゲルググ”が後方より迫り来る敵機を抑え、”ＭＳ－１４Ａ　ゲルググ”と”ＭＳ－０６Ｆ－２　ザク？Ｆ２型”がサイドに展開し側面より来る敵機を牽制している。その中央で、アヤは出来る限りの支援射撃を行っている。
しかし、不思議なものだ。数分前まで孤独で恐怖していたが、今は１人じゃ無い、誰かがそばにいて守ってくれていると、ハッキリ感じている。
ライト・グレイディ、やはりその存在が大きい。彼が現れてからというもの、状況はほぼ１８０。反転した。部隊はよりまとまり、完全にペースをこちらへ呼び込んでいる。圧倒的な戦力差も、今では何の意味も成していなかった。

《ニュータイプ》

そんな言葉が、アヤの脳裏を過ぎった。特殊な感応波を持つ新たな人類、それがニュータイプ。一年戦争時、《アムロ・レイ》や《シャア・アズナブル》がそうであったように、もしかするとライトもニュータイプなのではないだろうか。
だとすれば、ライト・グレイディという人物の説明がつく。非常に高いパイロット能力、急拵えの部隊を纏めるカリスマ性、未来予知したかのような言動や動き、熟練のパイロットと言ってしまえば

それまでだが、それだけでは物足りなさを感じずにはいられなかった。
次の瞬間、そんな思考を遮るかのように、敵機の接近を知らせるアラームが耳朶を打った。慌てて機体を反転させると、眼前にあのイフリート・タイプの機体が迫って来ていた。

「隊長を抜いた！？」

無意識にそう口走ったが、直ぐにそれは違うと頭に浮かんだ。抜かれたのはライトではなく、ナイト・サンダーランドの高機動型ゲルググの方だ。イフリート・タイプのパイロットにしてみれば、彼女を抜く事など容易いな事であろう。
そんな思考の最中、『トンファーを使え』という落ち着き払った声が響き、頭より先に動いた体が左腕に収納されているビーム・サーベルを一閃させ、トンファー状に発信されたプラズマの粒子束がイフリート・タイプのコールドソードを受け止めていた。
収納部体から引き抜いてビーム束を発信する通常のビーム・サーベルに比べて、《ビーム・トンファー》は引き抜く手間が無いため2，3秒早い、不意打ちや急な反応にはうってつけである。

『甘く見過ぎたな』

「いける！」

叫んだアヤは右腕からもビーム・トンファーを形成し、一瞬挙動を止めたイフリート目掛け突き立てる。コクピットを貫いたと確信したのも束の間、イフリートはコールドダガーでビーム・トンファーの切っ先を外させた。

「しつこいのよ！」

コクピットを切り裂こうと操縦桿を動かしたその時、イフリートの機体の腰部から黒煙が発生し始めた。それが”煙幕”だと気付いた時には遅く、既に後退していた。
すかさずアヤは、ビーム・キャノンのロックオンサイトにイフリートを収める。

「逃がさない！」

ロックオンした事を知らせるアラームが鳴り響くと共にトリガーに掛ける指へ力を込めかける。しかしそれは、『ほっとけ嬢ちゃん！』と言う野太い声に遮られた。

「嬢ちゃん？」

『逃げる奴より向かって来る奴を優先しろ！』

声の主、シュート・シェパードはそう叫びつつ《ヒート・ホーク》を豪快に振り回し、”ＭＳＭ－０４　アッガイ”の頭部を割るように叩き潰す。

『敵空戦隊、編隊を組んで接近！注意を！』

次いで反対側に位置するゲルググ、フェアリー・ハロウェイの声が耳朶を打つ。その直後、周辺でミサイルの着弾による爆発が起きた。

「くっ！直上なら…！」

叫ぶや否や、武器セレクションからミサイルを選択し、コンソー

ルに投影された4機の《ドダイ》をマークするや否や、トリガーを引く。
なけなしに残っていた3発の撃ち2発のミサイルはトリガーに連動し発射され、散弾さながら上空で分散。一気にドダイを撃破し、上空は爆煙で覆われた。

「やった！」

喜んだのも束の間、爆煙に紛れ2機の《ＭＳ－０６ＦＺ　ザク改》と、2機の《ＭＳ－０７Ａ　グフ》がそれぞれザク・マシンガンを撃ち放ちながら飛び降りて来た。
咄嗟の出来事であったが、アヤはビーム・キャノンと中距離ガトリング砲、そして頭部バルカンを掃射し弾幕を張り巡らせる。それにより、各1機ずつ被弾し爆散したが、難を逃れた2機が上手く着地した。すかさずザク改がヒート・ホークを装備し、急接近して来る。

「遅い！」

先程のイフリートに比べればザク改の動きは鈍重で単調。アヤは素早くビーム・サーベルを取り出し、居合いの容量で振りかぶられたヒート・ホークが下ろされる前にザク改の胴を真っ二つに切り裂いた。

「もう1機…！」

『きゃぁぁ！』

切断面から小爆発するザク改を尻目にグフへ中距離ガトリング砲の銃口を向けたその時、突然の悲鳴に肩を震わせた。

ＦＩＬＥ：２４　撤退戦（後書き）

自分で書いてて何なんですが、”スクエア隊形”ってあるんでしょうか？

次回、新キャラ登場と共に、上手く行けば戦闘を終了させる予定です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5691u/

機動戦士ガンダム ～たった２人の特殊部隊～

2011年11月20日19時14分発行